

# 国立国会図書館



本の歴史をたどる本

西洋の目録・書誌コレクションから

国立国会図書館の和図書

2011.3  
No. 600

# 国立国会図書館利用案内

## 東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1  
電話番号 03(3581)2331  
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)  
03(3506)3301(FAXサービス)  
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>  
利用できる人 満18歳以上の方  
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。  
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)  
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

### サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開館時間は17:00までです。	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
資料請求時間	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室および古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。	後日複写受付	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
		オンライン複写受付	月～金曜日 10:00～17:30 土曜日 10:00～15:30

■見学のお申込み／国立国会図書館 資料提供部 利用者サービス企画課 03(3581)2331 内線26111

## 関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3  
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)  
利用案内 0774(98)1212(FAXサービス)  
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>  
利用できる人 満18歳以上の方  
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。  
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)  
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

### サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求時間	月～土曜日 10:00～17:15	後日複写受付	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	オンライン複写受付	月～土曜日 10:00～17:00

■見学のお申込み／国立国会図書館関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

## 国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49  
電話番号 03(3827)2053  
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)  
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>  
利用できる人 どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。  
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。  
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)  
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。  
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

### サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	※1階子どものへや、世界を知るへやおよび3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。	
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求時間 火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日複写受付 火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30	

■見学のお申込み／国立国会図書館国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

### 02 新板平安城案内之圖 地図が伝える近世の京都

今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

### 04 本の歴史をたどる本 西洋の目録・書誌コレクションから

### 13 言葉のエッセイ 第3回 人称

### 14 想いも、歴史も、積み重なる。 国民読書年を振り返って

### 20 国立国会図書館の和図書

---

### 30 館内スコープ

レファレンス協同データベースをご存じですか？

### 31 本屋にない本

○『読売巨人軍75年史』

○『実録！“漫画少年”誌 昭和の名編集者・加藤謙一  
伝 平成21年度特別展』

### 33 NDL NEWS

○天皇后両陛下の行幸啓

○東京本館に書を展示

### 34 お知らせ

○平成23年度国立国会図書館職員採用試験

○シリーズ・いま、世界の子どもの本は？（第4回）  
「いま、ドイツの子どもの本は？」

○平成23年度図書館情報学実習生を募集します

○「本の万華鏡」第6回「へのへのもじえ—文字で絵を  
描く—」

○新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

### 38 『国立国会図書館月報』600号を迎えて

## 新板平安城案内之圖 地図が伝える近世の京都

戸澤 幾子

今回紹介するのは江戸期、寛文6（1666）年に出された京都図「新板平安城案内之圖」（写真1）である。近世の都市図は江戸、京都、大坂の三都を中心に刊行された。特に江戸期前半は江戸、京都が中心で、最も早い刊行は京都図とされている。伝存する最古の都市図は、寛永3（1626）年頃刊と推定される京都図「都記」<sup>みやこのき</sup>（京都大学附属図書館蔵）である。

京都図は、一般にその刊行時期から次の5期に区分される。

第1期の黎明期は寛永3（1626）年頃から約25年間。第2期は承応2～3（1653～1654）年から約30年間。第3期は貞享3（1686）年から約80年間、版元・林吉永の全盛期。第4期は第3期に続く約60年間、諸種の観光案内図が刊行された時代。第5期は天保2（1831）年から幕末期、版元・竹原好兵衛の全盛期。

京都の町は、豊臣秀吉の手により近世初頭にかけて、洛中を取り囲む形で御土居<sup>おどい</sup>が築かれ、寺院の多くが東部の寺町に集められた。また、平安京以来の方一町街区の中央に南北を貫く小路を通して「間の町」<sup>あい</sup>が置かれ（天正の地割）、徳川家康が二条城を建設するなど、漸次に町が整備されていった。ごく初期の京都図は、平安京の左・右京図の流れを汲み、市街部のみが描かれるが、整えられていく京都の姿を表している。その範囲は次第に洛外に広がり、東山をはじめ四方に位置する寺社名勝が加えられ、京都の観光地化と相まって観光案内図の様相を呈するようになる。

「新板平安城案内之圖」は上記の第2期に刊行された。洛中を東西南北に方格状に通る街路に通名、町名等が記され、江戸初期から17世紀中頃までの京都図に共通した特徴として、町家の部分が墨色に刷られている。それ以前に

刊行された図に比して縦横半分ほどの大きさで、描く範囲を北は鞍馬口、妙覚寺、南は東福寺、東寺を限りとし、洛外の記載はわずかである。左下方枠外には、東北部分に位置する公家屋敷等を実配置の拡大図として載せており（写真2）、このような方式は、確認される範囲ではこの図が最初である。また、同時期の図では、細かな道筋の通名を省略し枠外に示す方式が多くみられるが（例えば写真3～5「新板平安城并洛外之圖」）、この図は道筋を太くしその中に通名を記したことで町家墨塗部分の面積が小さくなり、全体が白っぽい印象を与えている。

京都図の洛外部分が徐々に広がりを見せ、情報が豊富になっていく中で、この図は同時期に刊行されたものとはやや性格を異にするようである。洛中案内を目的に携行の便を意識して作成された図であろうか。

上記の第2期から第3期への画期とされる「京大絵図」<sup>きょうおおえず</sup>（写真6）は、江戸中期に活躍し、後期の竹原好兵衛とともに京都図の二大版元とされる林吉永が刊行した図である。それ以前の縦長の図と大きく異なり、東西の縮尺を拡張して横幅が広くとられ、町家は白抜きとなり、洛外は洛中とは対照的に絵画的に描写されている。全体的に市街から四方を臨むように描かれ、寺社名勝には詳細な地誌の説明が施されている。大判京都図の様式がここに形づくられたといわれる。

国立国会図書館は、平成22年にさらに早い時期の京都図を購入した。早期に閲覧の準備を整えて京都図の研究に資することとしたい。

（とざわ いくこ 調査及び立法考査局文教科学技術調査室）



写真1



写真2

新板平安城案内之圖

〔京都〕 寺田十兵衛 寛文6 (1666) 年

1 鋪 68.7 × 47.8cm 筆彩

<請求記号 に-69> ※東京本館所蔵

写真1、2 新板平安城案内之圖

御所、二条城、洛外の山等は絵画風に描かれ、鴨川の川面の流れ、高瀬川の舟入等洛中が丁寧に記されている。この図は『京都図総目録』(大塚隆著 青裳堂書店 1981)の編纂当時は所在不明とされていた。

写真3、4、5 新板平安城并洛外之圖

〔京都〕 いつゝや吉兵衛 延宝8 (1680) 年

1 鋪 93.7 × 62.0cm 筆彩 <請求記号 WB39-5>

写真6 〔京大絵図〕(新撰増補京大絵図)

〔京都〕 林氏吉永 貞享3 (1686) 年

1 鋪 166 × 125cm 筆彩 <請求記号 本別12-27>



写真3



写真4



写真5

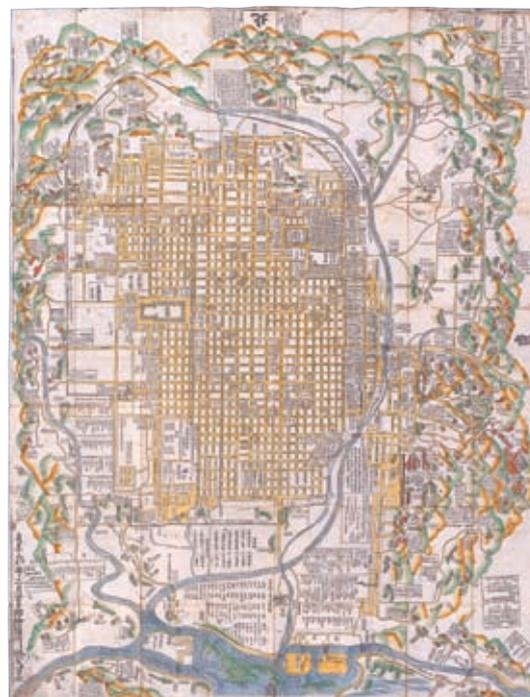


写真6

参考文献

- 矢守一彦、大塚隆編著『日本の古地図 4 京都』 講談社 1976
- 藤田元春著『都市研究平安京変遷史』 スズカケ出版部 1930

- 金田章裕編『平安京-京都 都市図と都市構造』 京都大学学術出版会 2007
- 京都大学大学院文学研究科地理学教室、京都大学総合博物館編『地図出版の四百年 京都・日本・世界』 ナカニシヤ出版 2007

## 本の歴史をたどる本

西洋の目録・書誌コレクションから

折田 洋晴



書誌学とは、書物や文献、文書を対象として、その成り立ちと伝達過程、あるいは時代背景や来歴などについて考察する学問である。国立国会図書館は、出版・印刷史上代表的な書誌学関係の洋書を所蔵している。

### はじめに

近年相次いでクラウス<sup>1</sup>とブレスラウアー<sup>2</sup>というニューヨークの古書籍商の旧蔵書がオークション<sup>3</sup>にかけられたが、その中に稀観書として知られる目録・書誌類が多数含まれていた。古書籍商はこうした古い書誌類を包括的に所蔵して、業務に活用しているわけである。

ここで紹介するコレクションは、パリの古書籍商エイユブラン<sup>4</sup>の旧蔵書である。彼はブリュッ

セル生まれだが、23歳頃からパリで古書籍業を営み、インキュナブラや挿絵本、自筆稿本のような稀観書を得意として、ハーヴァード大学などを顧客としていた。

彼は1977年5月14日に没している。日本ではその頃円高が進み、大学図書館などがヨーロッパからいくつかの大きな洋古書コレクションを購入した<sup>5</sup>。この仲介にあたったのがオランダの古書籍商ゲリッツ<sup>6</sup>で、エイユブランの旧蔵書もゲリッツ

の仲介により海を渡ったことが自伝<sup>7</sup>にそれとなく記されている。ゲリッツは友人の古書籍商クラヴルーユ (B. Clavreuil) を通じてこのコレクションのことを知ったという。国立国会図書館がエイユブランのコレクションを購入できたのは、ちょうど昭和53 (1978) 年度に外貨減らしを目的とする補正予算が組まれるという僥倖に恵まれたからであった。

エイユブランの旧蔵書は合計1,063冊からなる西洋書誌学関係コレクションで、これまで所蔵のなかった目録・書誌類の稀観書が多数含まれていた。その中から特徴的なものをいくつか紹介したい。

## I. 印刷・出版史関係資料

書誌学の基本は本を物質的側面から調べることであるが、誰が、どのように本を作ってきたかという歴史も非常に重要となる。エイユブランのコレクションにはフランスの初期印刷史を中心に、印刷・出版に関する資料が網羅されている。

1 Requin, P.H. *Origines de l'imprimerie en France (Avignon, 1444)*. Paris, 1891.

<請求記号 UE31-48>

南仏の愛書家ルカン師<sup>8</sup> (1851-1917) は、1890年に地元のヴォークルーズ県文書館で、プラハから来たワルトフォーゲルという金細工師が機械で書く技術を教えた旨の書かれた1444～1446年の文書を発見した。この文書の書かれた時期は、グーテンベルクがstrasブルクでの訴訟<sup>9</sup>後、マインツへ帰った頃である。グーテンベルクがまだ印刷術を完成させていない時代と考えた師は、すぐにワルトフォーゲルを印刷術の発明者とする論文を書いている。しかし、当時の印刷物そのものはまったく残されていなかったため、この発明がどのようなものであったかについて論争が続く。

本書は、論争の中でこの文書の原文を複製して解説したルカン師の3番目の論文を先頭に、師の解釈の誤りを指摘するベイル<sup>10</sup>の論文 (1900) と師の返答論文 (1902) が合冊されている。

1 Kraus, Hans Peter (1907-1988)

2 Breslauer, Bernard H. (1918-2004) は、1956年までの出版物の全米総合目録である *National union catalog pre-1956 imprints* の完成を記念して、1981年にニューヨークの愛書家団体 Grolier Club で開催された、古代から現代までの書誌169点を集めた展示会 "Bibliography, its History and Development" を監修した。

3 国立国会図書館ではこれらのオークション目録を蔵書としている。 *The celebrated reference library of H.P. Kraus*. New York : Sotheby's, 2003. <請求記号 UP27-B1>、 *Bibliotheca bibliographica Breslaueriana*. New York : Christies, [2005]. <請求記号 UP27-B3>

4 Heilbrun, Georges (1901-1977) とハーヴァード大学図書館とのつき合いについては、Stoddard, Roger E. 'More valuable to us than all the books in the world : Georges Heilbrun and his

Harvard Library friends.' *Gazette of the Grolier Club*, new ser. no. 47, pp.5-31がある。

5 フランス革命関係のミシェル・ベルンシュタイン (Michel Bernstein) 文庫 (専修大学図書館)、イエズス会関係のベッソン (Besson) コレクション (筑波大学附属図書館) 等。

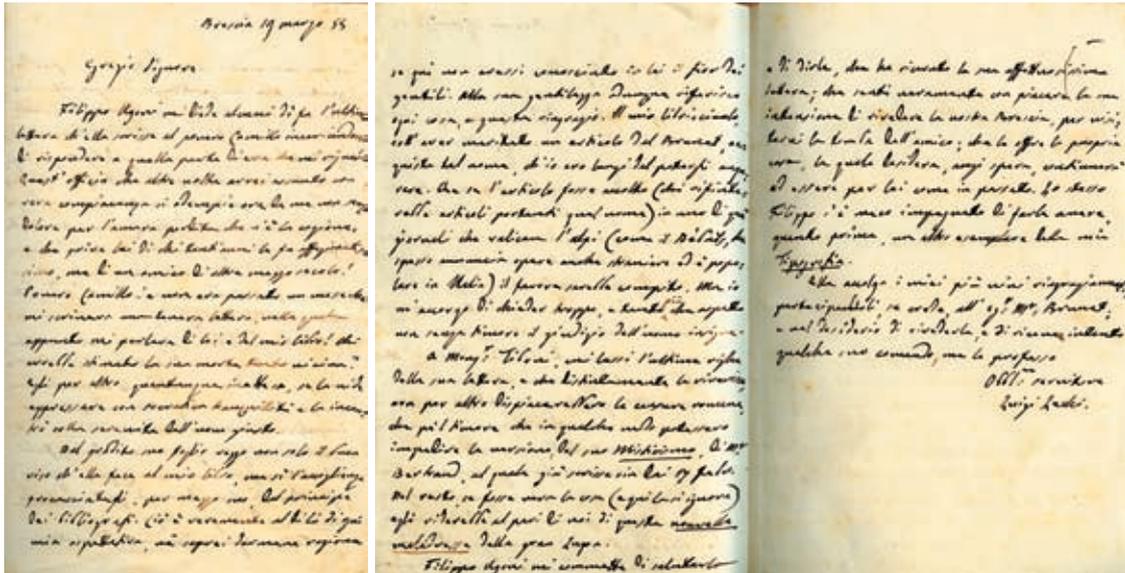
6 Gerits, Anton (1930- )

7 Gerits, Anton. *Books, friends and bibliophilia; reminiscences of an antiquarian bookseller*. New Castle : Oak Knoll Press, 2004. <請求記号 UE111-B1> p.299

8 Requin, Pierre Henri (1851-1917)

9 ストラスブルクで共同経営者が死亡したため、その兄から出資金の返還を求められた訴訟。印刷術研究のための資金であったと思われる。

10 Bayle, Gustave



2 レーキ『15世紀ブレーシア印刷誌』に挟み込まれた著者自筆書簡  
本書には5通の書簡(草稿?)が挟み込まれている。署名をみると著者レーキの自筆のようである。

2 Lechi, L. *Della tipografia brescianna nel secolo decimoquinto*. Brescia, 1854.

<請求記号 UP72-195>

著者レーキ<sup>11</sup>は北イタリアの都市ブレーシアの伯爵で政治家。ロッシーニのオペラ「タンクレディ」の改稿を行ったことでも知られる。本書はブレーシアで印刷されたインキュナブラを調査したもので、235点のインキュナブラが収録されている。英国図書館が他の図書館と協力して作成しているインキュナブラ目録ISTC (Incunabula Short Title Catalogue)<sup>12</sup>での収録数は267点なので、非常によく調べられているといえる。さらに、同地の印刷史の解説に続いて、トスコラーノなどブレーシア県の他の都市で16世紀までに刊行された本も調査している。巻末には当時の活字のファ

クシミリ(複製)やプリンターズ・マーク<sup>13</sup>、ウォーター・マーク<sup>14</sup>の複製が掲載されている。

3 Silvestre, L.-C. *Marques typographiques*. Paris, 1867. <請求記号 UE31-76>

16世紀までにフランスで、あるいはフランス語で印刷・刊行した印刷者・出版者のプリンターズ・マーク集で、1,310種のマークを銅版画で複製している。1853年から15分冊で刊行された。著者シルヴェストル<sup>15</sup>は家業の出版社を経営し、また本のオークションも主催した<sup>16</sup>。最終の第16分冊は各種の索引となるはずであったが、著者の死去により刊行されず、印刷者・出版者名のリストだけが作られた。社会学者のラコンブ<sup>17</sup>旧蔵書。

## II. 版画関係資料

挿絵は本を美しくする重要な要素である。挿絵本はエイユブランの得意分野であったので、版画関係資料が充実している。版画の歴史に関する資料、モノグラムの辞書、カタログ・レゾネ<sup>18</sup>、挿絵本研究などの重要な著作が揃っており、それらには版画の複製図版が多数収録されている。

4 Camus, A.-G. *Notice d'un livre imprimé à Bamberg en MCCCCLXII*. Brescia, 1799.

<請求記号 UE82-38>

南ドイツのバンベルクは、1461年にボナーの『宝石』<sup>19</sup>という挿絵入り寓話集が刊行された古い印刷都市である。本書はバンベルクで刊行された3点の挿絵本<sup>20</sup> *Ackermann von Böhmen* (ベーメンのアッカーマン)、*Historie von Joseph, Daniel, Judith und Ester* (ヨセフ、ダニエル、ユディット、エステル物語)、*Biblia pauperum* (貧者の



4 カミュ『1462年バンベルク印行本略述』で複製されている木版画 1462年に刊行された『ヨセフ、ダニエル、ユディット、エステル物語』中の挿図をV. Dubrenaが正確にトレースし、Duplatが木版に彫ったもの。ホロフェルネスの首を斬って帰ってきたユディットを喜んで迎え、犠牲を捧げるベトリアの人々が描かれている。

聖書)について詳しく記述している。これらの挿絵本は1792年にドイツの牧師シュタイナー<sup>21</sup>がアウグスブルクで発見したもので、フランス国立図書館(Bibliothèque nationale)が1799年に購入した<sup>22</sup>。著者カミュ<sup>23</sup>は法律を学んだフランス革命期の政治家で、革命記録を整理する文書館行政を担当した。書物の知識にもすぐれ、本書のような書誌学的な著作も多い。

<sup>11</sup> Lechi, Luigi (1786-1867)

<sup>12</sup> <http://www.bl.uk/catalogues/istc/>

<sup>13</sup> 印刷者を表す意匠。1500～1510年以前の本では奥付部分に、以後の本では標題紙に付けられた。

<sup>14</sup> 紙の透かし模様となっているマークや意匠など。

<sup>15</sup> Silvestre, Louis-Catherine (1792-1867)

<sup>16</sup> ボン・ザンファン街にあったmaison Silvestreがその会場となった。

<sup>17</sup> Lacombe, Paul (1834-1919)

<sup>18</sup> 著作を類型別に分類した目録。

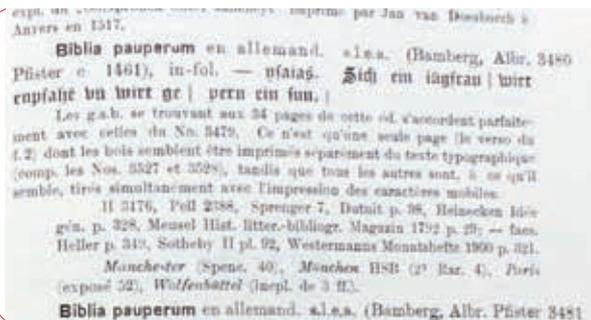
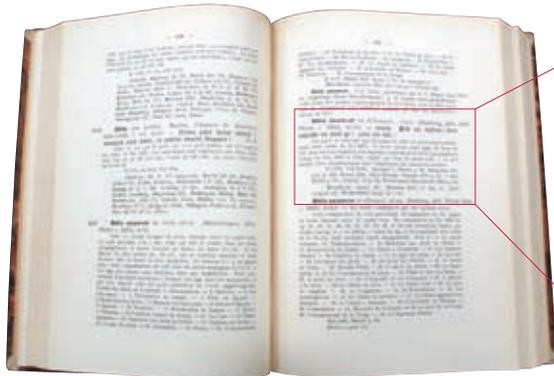
<sup>19</sup> Boner, Ulrich. *Der Edelstein*.

<sup>20</sup> ドイツの印刷業者Albrecht Pfisterが1462～1463年に印刷したもので、3点が1冊に合冊されている。

<sup>21</sup> Steiner, Mathias Jakob Adam (1740-1796)

<sup>22</sup> フランス国立図書館の電子図書館Gallica (<http://gallica.bnf.fr/>) でデジタル画像を見ることができる。

<sup>23</sup> Camus, Armand-Gaston (1740-1804)



5 シュライバー『15世紀版画提要』第5巻 pp.104-105

4 カミュ『1462年バンベルク印行本略述』で解説されている「貧者の聖書」の目録記述部分。英国図書館のインキュナブラ目録ISTCの初期挿絵本の書名記入は、この『15世紀版画提要』での形を採用している。

5 Schreiber, W.L. *Manuel de l'amateur de la gravure sur bois et sur métal en XVe siècle.* Berlin, 1891-1911. 8 v. in 4.

<請求記号 YP14-614>

著者シュライバー<sup>24</sup>はドイツの美術史家で、特に15～16世紀の版画、木版本 (block book)、挿絵本の研究で有名である。本書は5千点を超す初期 (15世紀以前) の木版画、銅版画、木版本の目録で、第6～8巻は複製図版に充てられている。版画を対象にした第1～3巻は1926～1930年に *Handbuch der Holz- und Metallschnitte ...* というタイトルで再刊された。第5巻は挿絵入りインキュナブラの目録で、4で紹介したバンベルクの3点の挿絵本も掲載されている。300部限定。

シュライバーは自身が版画のコレクターで、彼の所蔵していた614点の版画が1909年にウィーンで売り立てられた。エイユブランのコレクション

には、その目録<sup>25</sup>も含まれている。

6 5th Prince d'Essling. *Les livres à figures vénitiens de la fin du XVe siècle et du commencement du XVIe.* Florence & Paris, 1907-15. 3 v. in 5. <請求記号 YP21-29>

著者マッセナ<sup>26</sup>は、ナポレオン軍の元帥でエスリング大侯爵兼リヴォリ公という貴族となったアンドレ・マッセナ<sup>27</sup>の孫にあたる。彼は父フランソワ・ヴィクトル<sup>28</sup>同様、本のコレクターであった。父は旅行記の収集家であったが、彼は挿絵本を収集した。特に15～16世紀にヴェネツィアで刊行された挿絵本を集め、1896年には『挿絵入りミサ書研究』<sup>29</sup>を刊行している。本書は1450～1525年にヴェネツィアで刊行された挿絵本を網羅したもので、1907年より分冊刊行を始め、全巻予約販売 (分売不可) 方式が取られた。挿絵の

版画を忠実に複製した豪華本で、各冊125フラン、第1冊刊行後は150フランという価格であった(当時の本の平均単価は約4.5フラン)。最終巻(pt.3)は著者死去のため、エスリング文庫の司書であったジェラルド<sup>30</sup>が編集した。国立国会図書館本は300部限定のうち第23番。

7 Duplessis, G. *De la gravure de portrait en France*. Paris, 1875.

<請求記号 KC314-74>

フランス国立図書館は、1667年に当時の王室図書館(Bibliothèque du roi)が12万点からなるマロール・コレクション<sup>31</sup>を購入して以来、大きな版画コレクションを所蔵し、版画の専門家を多数輩出してきた。本書の著者デュプレシス<sup>32</sup>は、フランス国立図書館版画室に勤め、若い頃からボッス<sup>33</sup>の版画目録<sup>34</sup>などを作成した。本書はフランスの肖像版画の歴史を述べたものであるが、デュプレシスは1896～1898年に肖像版画目録も刊行している。エイユブランのコレクション中には『フランス版画史』『フランスの芸術版画



7デュプレシス『フランス肖像版画』に貼られた蔵書票  
旧蔵者エイユブランの蔵書票(27×27mm)。  
“Faventibus astris(好都合な星により)”というモットー  
が記されている。

家 9-11巻』などデュプレシスの他の著作も含まれている<sup>35</sup>。この本は、裏表紙見返しにエイユブランの蔵書票が貼られている。

### Ⅲ. 蔵書目録・売立目録

本が長く残るには、所蔵者が丁寧に保管する必要がある。現在残っている本は、オークションなどを通じて所蔵者を変えてきた。そうした来歴を示す重要な資料が蔵書目録や売立目録で、書誌学の基本資料である。

24 Schreiber, Wilhelm Ludwig (1855-1932)

25 *Catalogue de la collection précieuse de mr le professeur W.L. Schreiber ... contenant les monuments très anciens de la gravure sur bois ... livres xylographiques, ... : vente à Vienne 3-4 mars 1909*, Joseph Baer & Co et Gilhofer et Ranschburg. Frankfurt a.M. : Joseph Baer, [1909]. <請求記号 UP72-123>

26 d'Essling, Victor Masséna (1836-1910)

27 Masséna, André (1758-1817)

28 Masséna, François Victor (1799-1863)

29 *Études sur l'art de la gravure sur bois à Venise*. Paris : J. Rothschild, 1896. <請求記号 YP14-590>

30 Gérard, Charles

31 Marolles Collection フランスの僧侶Michel de Marolles (1600-1681)は版画の大コレクターで、そのコレクションをルイ14世のために財務総監コルベールが買い取った。

32 Duplessis, Georges (1834-1899)

33 Bosse, Abraham (1602-1676)

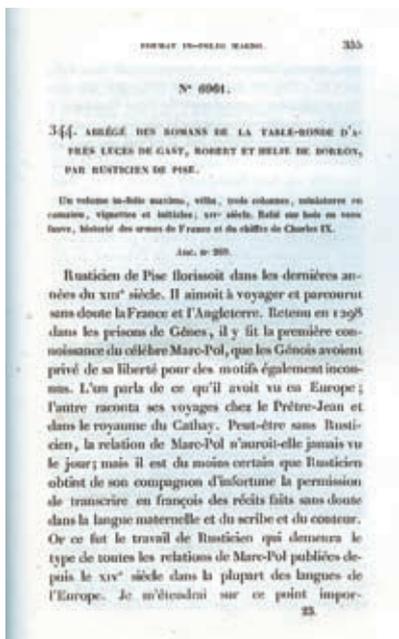
34 *Catalogue de l'œuvre de Abraham Bosse...* Paris, 1859. <請求記号 KC314-75>

35 *Histoire de la gravure en France*. Paris : Rapilly, 1861. <請求記号 KC314-37>、*Le peintre-graveur français, ...* t.9-11. Paris, 1865-1871. <請求記号 KC314-53>

8 Paris, P. *Les manuscrits françois de la Bibliothèque du roi*. Paris, 1836-48. 7 v.

<請求記号 UP72-138>

フランス王室図書館での写本の収集は17世紀から本格的となり、1682年には写本を通し番号で管理した目録が作られている。本書は王室図書館で所蔵していたフランス語写本 (fonds français 通し番号ではno.6701~7310) について、1828年からフランス王立図書館 (Bibliothèque royale) の写本部に勤めていたパリス<sup>36</sup>が作成した目録で、1,028件の写本について詳細な解題がなされてい



8 パリス『王室図書館所蔵フランス語写本目録』 p.355  
ピサのルスティケロが書いたアーサー王伝説の15世紀写本 (旧番号6961、現在の写本番号Fr.340) 解題の冒頭部分。ルスティケロはジェノヴァの獄中でマルコ・ポーロが口述する『東方見聞録』を筆記したとされる人物で、まずその説明がされている。フランス国立図書館は祖本に最も近いとされる『東方見聞録 (Le Divisiment dou monde)』(旧番号7367、Fr.1116) を所蔵している。

る。本書に収録された写本は、現在では新たな番号Fr.1~993のもとに再整理されている。

9 Charavay, E. *Lettres autographes composant la collection de M. Alfred Bovet*. Paris, 1885.

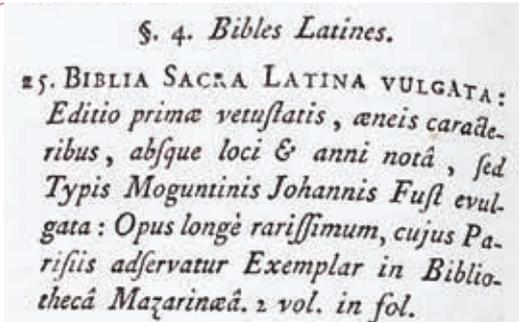
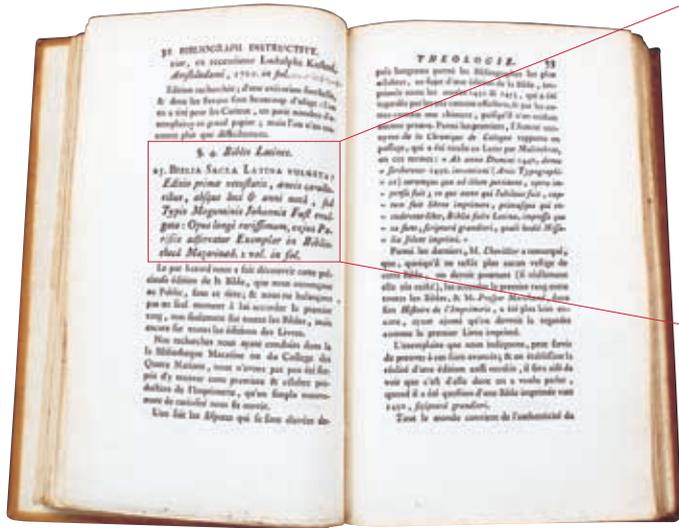
<請求記号 UP72-122>

マビヨン<sup>37</sup>以後の古文書学の進展にあわせるように自筆文書のコレクターも増え、ボヴェ<sup>38</sup>はフランス東部の都市ヴァランティネー (Valentigney) に有名な自筆文書コレクションを作った。このコレクションは1884年2月から翌年6月にかけて3度に分けて売り立てられたが、本書はその3冊の販売目録を合冊したもので、もとの表紙も残されている。目録を作ったシャラヴェイ<sup>39</sup>は自筆文書を扱う書店の家系に生まれ、古文書学校を卒業してアーキビストとなった。

10 Picot, E. *Catalogue de livres composant la bibliothèque de feu M. le baron James de Rothschild*. Paris, 1884-1920. 5 v.

<請求記号 UP72-118>

富豪ロスチャイルド家は愛書家としても知られる。イギリスからフランスへ移り、ワイン製造で知られるナサニエル<sup>40</sup>の息子であるジェームズ<sup>41</sup>も愛書家で、20代からコレクションを始めた。彼の妻テレーズ<sup>42</sup>も愛書家で、夫が36歳の若さで急死した後もコレクションを続けた。また彼らの



11 ドウ・ビュール『有用書誌』pp.32-33  
マザラン図書館 (Bibliothèque Mazarine) が所蔵する聖書の書誌で、グーテンベルク聖書が最初の印刷本であることを明記している。以後、各地のグーテンベルク聖書発見のきっかけとなった。

息子アンリ<sup>43</sup>もコレクターとなった。本書は彼ら3人が集めた蔵書の目録で、36年かけて刊行された。作成したのはフランス国立図書館のピコ<sup>44</sup>で、この目録に収録された蔵書の大半は、1949年にフランス国立図書館に寄贈された。400部限定。

#### IV. 書誌類

書誌とはこれまでどのような本が作られてきたかを記録したもので、本の違いを正確に認識するために記述書誌学が発達してきた。エイユブランのコレクションには、稀本書誌、出版者書誌、都市別書誌など各種書誌類が系統的に集められている。

11 Bure, G.-F. de *Bibliographie instructive*. Paris, 1763-68. 7 v.

<請求記号 UP72-142>

著者ドウ・ビュール<sup>45</sup>は出版業の家系に生まれ、1755年にルビュード (Rebude) の筆名で *Museum typographicum* という小冊子を書いて書誌学者としてスタートした。本書は版の違いを正確に突き止める本格的な書誌学的著作で、神学、法学、諸学芸、文学、歴史という分類体系は、その後の書誌での主題分類の標準となった。また、グーテンベルク聖書を「マザラン聖書」として初めて詳述したことで有名である。

36 Paris, Paulin (1800-1881)  
37 Mabillon, Jean (1632-1707)  
38 Bovet, Alfred (1841-1900)  
39 Charavay, Étienne (1848-1899)  
40 Rothschild, Nathaniel de (1812-1870)

41 Rothschild, James (1844-1881)  
42 Rothschild, Thérèse (1847-1931)  
43 Rothschild, Henri de (1872-1947)  
44 Picot, Emile (1844-1918)  
45 Bure, Guillaume-François de (1731-1782)

12 Renouard, A.A. *Annales de l'imprimerie des Estienne*. 2.éd. Paris, 1843.

<請求記号 UE31-63>

著者ルヌアール<sup>46</sup>は1793年に出版業を始める一方、本を集めながら印刷史を研究した。彼が1803～1812年に刊行した15～16世紀ヴェネツィアの出版者マヌツィオ家の出版物総覧は、画期的な書誌となった。1826年には息子ジュール<sup>47</sup>に出版業を継がせ、自身はさらに出版史の研究を行った。1837～1838年には16世紀パリの出版者エティエンヌ家の出版物総覧を刊行した。本書はその第2版である。ポール・アルノルデ<sup>48</sup>旧蔵書。

13 Baudrier, H.L. *Bibliographie lyonnaise*. Lyon, 1895-1921. 12 v.

<請求記号 UP72-159>

法曹家ボードリエ<sup>49</sup>は本のコレクターでもあり、リヨンの印刷史を研究する大部のノートを書いた。息子ジュリアン<sup>50</sup>は書誌学者となり、そのノートを整理して1895年から本書の刊行を開始した。第1巻は15～16世紀のリヨンの印刷者・出版者の一覧で、第2巻以降は各印刷者・出版者ごとの16世紀出版物の書誌である。リyonはパリに次ぐ大出版都市であり、本書は全12巻とい



12 ルヌアール『エティエンヌ家年報』に貼られた蔵書票画家ブラックモン (F. Braquemond) のデザインしたアルノルデの蔵書票 (91 x 79 mm)。“Nunquam amicorum (決して友のものでない)”と記されているが、これは16世紀フランスの愛書家グロリエ (J. Grolier) が自らの蔵書に“Jo. Grolieri et Amicorum (J.グロリエとその友人たちのもの)”と記したことへの反論。

う大部なものとなった。最終巻はジュリアンの没後、義兄テレバス<sup>51</sup>が執筆している。また1950年にはリヨンの歴史家トリクー<sup>52</sup>の作成した本書の索引が刊行された。300部限定。

(おりた ひろはる 主題情報部司書監)

<sup>46</sup> Renouard, Antoine Augustin (1765-1853)

<sup>47</sup> Renouard, Jules

<sup>48</sup> Arnauld, Paul

<sup>49</sup> Baudrier, Henri-Louis (1815-1884)

<sup>50</sup> Baudrier, Julien (1860-1915)

<sup>51</sup> Terrebasse, Humbert de (1842-1927)

<sup>52</sup> Tricou, Georges (1861-1949)

# 言葉のエッセイ

## 第3回 人称

今回のテーマは人称である。動詞の活用形が人称に応じて変化する人称変化は、主語を出さなくても主語がわかるという意味では便利かもしれないが、日本語のように人称変化をさせなくても主語を省略する言語もあり、それで不自由なく過ごせているのであるから、人称変化などなくてもいいと個人的には思う。

主語を出さなくてもわかると書いたが、人称が異なっても同じ活用形を使うということもある。多くの言語にある2人称の敬称形（自分よりも上位にある人や、あまり親しくない相手に使う人称形）は、たいてい別の人称と同じ変化形をとる。2人称敬称形は、動詞の変化だけでなく、所有代名詞（あなたの）、再帰代名詞（再

帰動詞という動詞を作るときなどに必要とされる）になるときも別の人称と同じになるため、文法上の取り扱いがほとんど別の人称と同じことになる。ドイツ語の場合は、2人称の敬称形は、3人称複数「sie」と同様に扱う。そのかわり、2人称の敬称形の表記は大文字で始める「Sie」である。

イタリア語の場合は、2人称の敬称形は3人称単数女性形の「lei」と同様に扱う。ちなみに、古い用法では、2人称複数の「voi」と同様に扱う。2人称の敬称形を2人称複数と同様に扱う言語は比較的多い。なぜそうするのかよくわからないが、フランス語の「vous」しかり、ロシア語の「вы (ヴィ)」しかり、グルジア語の「თქვენ (トウクヴェン)」しかり。

中には2人称敬称形の独自の代名詞を持っている言語がある。スペイン語の「usted」やハンガリー語の「maga」である。これらは、3人称単数と同様に扱う。

人称で面倒なのは、動詞の変化形を覚えることである。多くの言語では、主語の人称により動詞の活用形が変わる。これだけでも面倒なのだが、恐ろしいことに目的語の人称によっても動詞の活用形が変わる言語もある。

例えばハンガリー語の場合、主語が1人称単数で、目的語が2人称の場合は、動詞の語尾に「-lak」または「-lek」がつく（いずれがつくかは、動詞の母音によって決まる。これは母音調和といい、後の回で触れる）。「好きである」という動詞は「szeret」で、「私は君が好きだ」というときの動詞の活用形は「szeretlek」になる。

もっとすごいのは、グルジア語である。ハンガリー語のように限定的でなく、ほとんどすべての目的語の人称によって動詞の活用形が変化する。その種類は単純計算で6(主語の人称の種類)×6(目的語の人称の種類)=36であり、「私が私を」とか「あなたがあなたを」という場合は除くとして、約30近い活用形を覚えなければならないことになる。

また、名詞に所有者の人称を表す語尾を付けるという言語がある。例えば、ハンガリー語とベルシャ語である。「本」は、ハンガリー語では「könyv」、ベルシャ語では、「كتاب (ケターブ)」であるが、「私の本」は、「könyvem」「كتاب (ケターバム)」となる。

以上、人称について面倒な規則がある言語について述べてきたが、日本語にはそうした面倒な規則がなく大変よらしい。しかし、日本語ほど1人称と2人称の人称代名詞の数が多い言語はそうないだろう。「私」「あたし」「俺」「わし」「自分」「小生」「朕」「あし」や「あなた」「君」「あんた」「汝」「お前」「貴様」等々。

(ゴガク・マニアシュヴィリ)



# National Year of Reading

## 想いも、歴史も、積み重なる。 国民読書年を振り返って

皆さんは、去年どのくらい読書をしたでしょう。「去年は忙しくて読書どころじゃなかったけれど、今年は1か月に〇冊本を読むぞ」と新年に決意した方もいるかもしれません。年末年始に電子書籍端末を入手し、ダウンロードした書籍を楽しんでいる最中という方も少なくないのではないのでしょうか。ところで、皆さんは平成22年が「国民読書年」だったということをご存じでしたか？



### 1 国民読書年とは

我が国で読書離れが指摘されて久しく、本を読まなくなったことに起因する読解力や言語力の低下などを懸念する声も聞かれます。そうした状況を受けて、国は平成11年に「子ども読書年に関する決議」を国会で採択、平成13年には「子どもの読書活動の推進に関する法律」を、平成17年には「文字・活字文化振興法」を制定し、さま

ざまな世代に向けた読書振興のための施策を行ってきました。法整備を受け、地方自治体も「子ども読書活動推進計画」を策定するなど、読書推進の取組みを進めています。また、民間では「朝の十分間読書運動」など、読書に関する市民活動が活性化しており、読書への国民の意識は再び高まりつつあるように見えます。

こうした気運の中、読書振興・推進の動きを一

開催日	行事名	会場
2月20日～9月5日	展示会「日本発☆子どもの本、海を渡る」	国際子ども図書館
3月6日	講演会「『ひろしまのピカ』が海を渡ったとき～日本の絵本の翻訳出版に携わって」（講師：栗田明子氏）	国際子ども図書館
4月17日	国民読書年フォーラム「日本の言葉と文化を未来に伝える—図書館はなぜ必要か」	東京本館
4月24日	講演会「翻訳は三人四脚『精霊の守り人』の作者と訳者、大いに語る」（講師：上橋菜穂子氏、平野キャシー氏）	国際子ども図書館
5月5日	伝統芸能で「ことば」を楽しもう！ 子どものための落語会（出演：古今亭菊之丞師匠）	国際子ども図書館
6月17日	日本語と翻訳—シェイクスピア「マクベス」朗読と作品解説—（朗読：演劇集団「円」、講演講師：小林章夫氏）	東京本館
6月17日～7月20日	小展示「往年のベストセラー—日本人は何を、どう読んできたか」	関西館
6月19日	日本語と翻訳—シェイクスピア「マクベス」朗読と作品解説—（朗読・講演講師は東京に同じ）	関西館
7月13日	バーバラ・リゾン氏講演会「図書館と読書—ドイツ・ヨーロッパの経験—」	東京本館
7月16日	講演会「電子図書館の可能性」（講演：長尾真、パネリスト：長尾真、仲俣暁生氏、藤川和利氏ほか）	関西館
8月21日～9月12日	展示会「世界のバリアフリー—絵本展—国際児童図書評議会2009年推薦図書展」	国際子ども図書館
9月7日	ロジェ・シャルリエ氏講演会「本と読書、その歴史と未来」	東京本館
9月15日	データベースフォーラム—さがす、しらべる、よむ。	関西館
9月18日～2011年2月6日	展示会「絵本の黄金時代—1920～1930年代—子どもたちに託された伝言」	国際子ども図書館
10月9日	島多代氏講演会「絵本が運んだ子どもたちへの伝言：1920年代」	国際子ども図書館
10月20日	シンポジウム「読書とは何か」（基調講演：松岡正剛氏、パネリスト：和田敦彦氏、橋本大也氏、杉本卓氏）	東京本館
10月22日	データベースフォーラム—さがす、しらべる、よむ。	東京本館
10月24日	読み聞かせ講座「親子で楽しむ昔話」（講師：山根基世氏、好本恵氏）	国際子ども図書館
11月27日	シンポジウム「絵本の黄金時代—1920～1930年代—アメリカとソビエトを中心に—」（パネリスト：ヴェレナ・ラシュマン氏、レナード・マーカス氏）	国際子ども図書館
12月1・2日	国際シンポジウム「本を読むという文化—デジタル時代における展開・創造性とアクセスを育む手段としての著作権—」	東京本館

国立国会図書館の国民読書年記念行事一覧

層確実なものとするために、政官民が協力し、国をあげてあらゆる努力を重ねることを宣言した「国民読書年に関する決議」が平成20年に国会で採択され、平成22年が「国民読書年」と定められました。

折しも、平成22年5月に米アップル社のiPadが発売されたことを端緒として、日本でも各種の電子書籍端末が相次いで発表されました。電子書籍の企画・出版をめぐる出版界等でもさまざまな動きがあり、各種メディアでは「電子書籍元年」と報じられるなど、いま振り返れば、平成22

年は読書や出版に関する話題の多い一年でした。

## 2 国立国会図書館の取組み

国立国会図書館は、国民読書年を広く一般に周知するとともに、読書と図書館に関する理解を深め、読書の楽しさや豊かさをお伝えするよう、東京本館、関西館、国際子ども図書館の各施設で、一年を通じて幅広い世代を対象としたさまざまな記念行事や展示会を企画しました（表）。講演会・シンポジウムのほか、プロの実演者による落語、朗読劇、読み聞かせなどでは、黙読とはまた違っ



「日本語と翻訳—シェイクスピア『マクベス』朗読と作品解説—」（関西会場 東京会場の写真はp. 14右上）

た、音の響きを通した読書の魅力を感じていただけたのではないのでしょうか。

講演会やシンポジウムでは、国立国会図書館による国民読書年記念行事という位置づけをふまえ、読書と図書館との関係を意識したテーマを多く取り上げました。電子書籍やケータイ小説など、新しい媒体・形式での読書スタイルが現れてきた中で、読書文化を支え、育んできた図書館は、今後、そうした動きにどのように向き合っていくこ

とを求められているのでしょうか。図書館での取り組みや専門家を交えた議論などを通して、デジタル化と著者の権利の関係、電子図書館のあるべき姿、図書館は利用者にどのように本を届けていくか（収集のあり方や貸出方法など）といった課題が浮かび上がりました。

このほか、本誌の国民読書年関連の連載「本の森を歩く」では、様々なテーマのもとで国立国会図書館の蔵書をご紹介します。

### 3 記念行事から考える読書

#### (1) 声に出して読む

「日本語と翻訳—シェイクスピア『マクベス』朗読と作品解説—」(6月)では、演劇集団「円」によるシェイクスピアの戯曲「マクベス」の日本語での朗読と、小林章夫氏(上智大学文学部教授)による作品解説を行いました。会場では、東京本館、関西館それぞれの蔵書から、シェイクスピア作品の明治以降の日本語訳(東京本館)や「マクベス」の中国語訳(関西館)などを展示し、シェイクスピアの作品を英語以外の言葉で読むことの意味を考える機会としました<sup>1</sup>。

「マクベス」は現在も演劇として舞台上演されますが、今回は「朗読」という形式を取ったことで、シェイクスピアの言葉のもつ力強さと、それを現在まで変わらずに伝えてきた戯曲の存在をより強く感じる事ができたのではないのでしょうか。当日の参加者アンケートでは、「セリフの力の強さというものに、感銘を受けた」「声に出して本を読むことの意義を再確認した」といった声が聞かれました。戯曲を目で読み、自分の内部で舞台を再構成していくこと、演者の発するセリフを耳で聞き、言葉そのもののもつ力をダイレクトに味わうことなど、「書を読む」ことの多彩な魅力と感動をいささかなりとも伝えることができたのではないかと考えています。

#### (2) 文化の違いを知る

国際子ども図書館で開催された展示会「日本発 ☆子どもの本、海を渡る」(2月～9月)は、海外で翻訳出版された日本の児童書をテーマとし、30以上の国と地域で出版された翻訳書と日本語の原書を約300点展示して、日本の児童書の国際的な広がりを紹介しました<sup>2</sup>(p.14中央に会場写真)。

児童書や絵本には、文章とともに絵が重要な役割を果たしているものが多くあります。今回展示された作品の中には、原書の絵本に描かれた日本のお風呂のふたが翻訳書ではなくなっていたり、「魔女は怖いもの」というイメージの強い国では、原書の表紙の可愛い少女の魔女のイラストが現地のイメージにそった絵に変更されたりといったように、翻訳された国の生活や文化にあわせて原書のイラストが修正されたケースなどが紹介されており、国による文化の違いをビジュアルに感じることができました。

一方で、原書の表紙絵などをそのまま採用した作品もあります。原書の体裁を生かした翻訳書からは日本のリアルタイムの生活や伝統的な文化が感じ取れるでしょうし、それぞれの国の事情にあわせて絵や文章の表現に変更が加えられた作品には、子どもにも理解できるよう工夫しながら日本の児童書を紹介しようとする姿勢がうかがえます。

国際子ども図書館は、子どもの読書活動推進の

支援を活動目的の一つとしています。この展示は、外国の児童書を積極的に収集してきた国際子ども図書館ならではの所蔵資料を生かして、児童書に見られる彼我の文化の違いや、それを超えて理解し合おうとする態度を伝える、グローバルな視点での読書文化を提示する内容となるよう努めました。

### (3) 著作物へのアクセス

国民読書年記念行事の締めくくりとして、国際図書館連盟 (IFLA)、世界複製権機構 (IFRRO)、国際出版連合 (IPA)、世界知的所有権機関 (WIPO) との共催による国民読書年記念国際シンポジウム「本を読むという文化—デジタル時代における展開・創造性とアクセスを育む手段としての著作権—」を開催しました (12月)。リービ英雄氏、長尾真国立国会図書館長による基調講演のほか、著作権やリテラシーに関する7つのセッションが行われ<sup>3</sup>、国内外から延べ約340人の参加がありました (p. 14中央に会場写真)。

すべての人々が著作者にも読者にもなり得るデジタル情報通信技術時代の中で、「図書館、著者、出版者がどのように“読む”という文化を育ていくことができるか」という問題意識のもと、電子書籍、オンラインライセンス、新たな技術基盤等、従来型にとどまらない著作物へのアクセス方法を取り上げ、図書館、権利者、出版者等それぞれの立場から、著作物の保護と利用のバランスを

図ることの重要性などに関する活発な議論が行われました。議論では、電子書籍時代が到来しつつある現在、読書のあり方や図書館の役割が変化しても読書の重要性は変わらないことや、日本の国民読書年のような取組みが非常に有意義であるということが強調されました。

参加者からは「デジタル化と著作権の問題に、広い視野でまとめて触れる機会になった」「デジタル時代において、どのように読書環境を整えることが必要なのか、大変に多くの問題を含んでいる」などの声が寄せられました。

このシンポジウムは、「電子書籍元年」の国民読書年にふさわしく、デジタル化時代の著作権と読書について、国際的かつ専門的で多様な観点から考える機会となりました。

このほか、講演会「電子図書館の可能性」や、ロジェ・シャルチエ氏 (コレージュ・ド・フランス教授) を招いての講演会「本と読書、その歴史と未来」(詳細は本誌次号に掲載予定) などを開催しました。記念行事全体を通じて、過去から未来 (時間)、世界と日本 (地域)、紙からデジタル (媒体の変化) など、多様な切り口で読書を見渡すことができたのではないのでしょうか。



「子どものための落語会」(国際子ども図書館) 壇上は古今亭菊之丞師匠

## おわりに

国民読書年に際して国立国会図書館が作成したポスター (p. 14左上写真) は、本を積み重ねたデザインに「想いも、歴史も、積み重なる。」という言葉を配して、国立国会図書館が所蔵するすべての出版物に凝縮された著者の思いや、所蔵資料の総体から読み取れる読書や出版の歴史を表現したものです。ポスターのデザインと同様、国民読書年に関連したいずれの取組みも、明治期、あるいはそれ以前からの出版文化を蓄積・保存してきた国立国会図書館ならではの視点を盛り込んだ

ものになったと自負しています。

国民読書年、そして国立国会図書館の取組みが、読書や図書館について考えるとともに、読書の魅力に改めて触れるきっかけになれば、望外の喜びです。

(総務部総務課)

1 国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) 2010年7月5日のニュースに展示資料リストを掲載しています ([http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2010/1189431\\_1531.html](http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2010/1189431_1531.html))。

2 展示会で紹介した作品の一部は、国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) の電子展示会で見ることができます (<http://www.kodomo.go.jp/anv10th/>)。

3 当日のプログラム、発表要旨 (日本語)、資料 (英語のみ) 等を国立国会図書館ホームページに掲載しています (<http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/sympo1201.html>)。

## 国立国会図書館の和図書

鈴木 宏宗



1 坪内祐三「探訪記者松崎天民・第三部 (4) 西園寺公望の開いた雨声会」『ちくま』(472) 2010.7 <請求記号 Z21-235> p.44  
約20年前は、同文中の『犯罪哀話』(佐藤出版部 1916)は上野図書館旧蔵書の乙部図書(本文p.24参照)のため利用できなかった。『欽楽の底より』(磯部甲陽堂 1918)、『運命の影に』(磯部甲陽堂 1917)は国立国会図書館のカード目録では探すことはできず、冊子目録(『帝国図書館和漢図書書名目録』(訂補縮刷版 汲古書院 1982-1985 <請求記号 UP111-390>)を検索しなければ見つからなかった。現在は3冊とも「近代デジタルライブラリー」(<http://kindai.ndl.go.jp/>)で本文を閲覧できる。

2 「シマ」という言葉については、図書館問題研究会用語委員会編『みんなの図書館入門用語篇』図書新聞 1981 pp.58-60 <請求記号 UL2-16>参照。この言葉については福田秀夫「図書出納をめぐるいくつかの問題」『図書館研究シリーズ』(10) 1966.2 p.88 <請求記号 Z21-127>でも使われている。このようなシマを利用するガイドとして、宇津純、中村規子著『国立国会図書館目録・書誌の使い方』(研修教材シリーズ no.9) 国立国会図書館 1992 <請求記号 UL731-E16>がある。

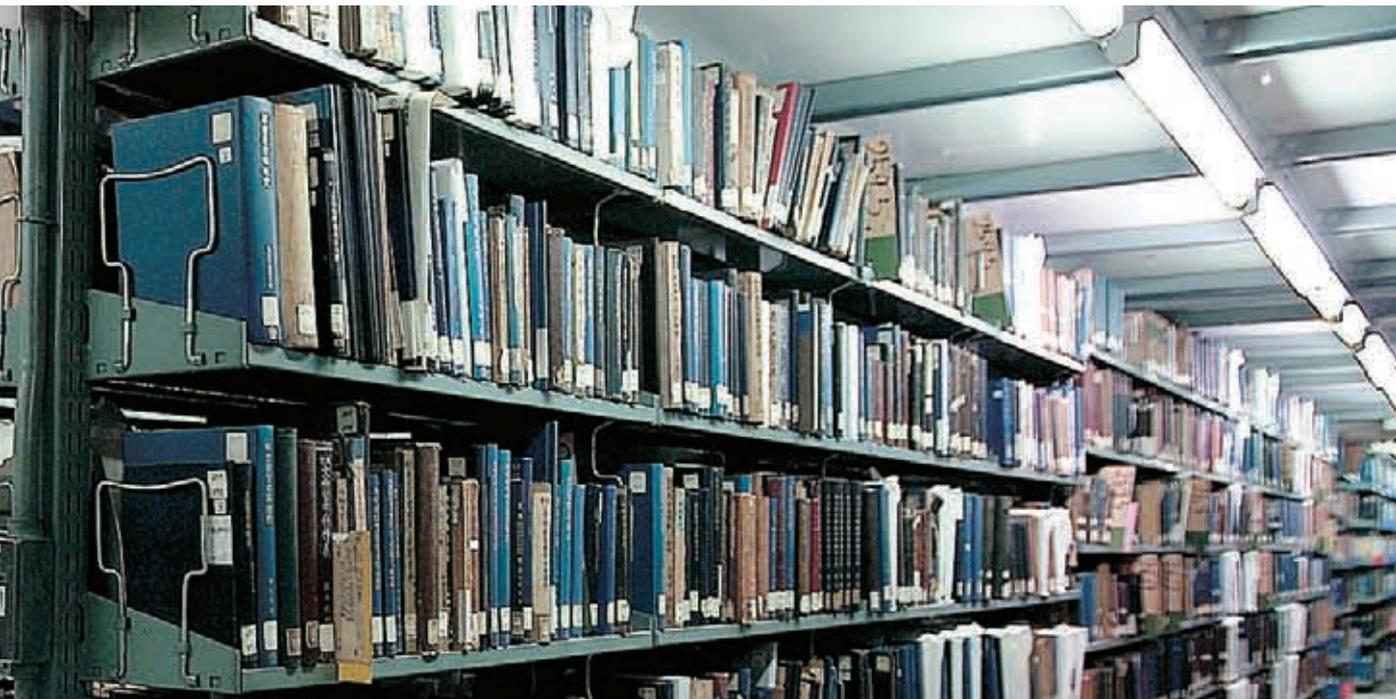
3 国立国会図書館の蔵書全体については、や

### はじめに

評論家の坪内祐三氏が、松崎天民(明治期のジャーナリスト)のある著作について、20年近く前に国立国会図書館の著者名のカード目録で見当たらなかったものが、オンライン目録で見つかったと書いている<sup>1</sup>。

現在、ほとんどの和図書は国立国会図書館蔵書検索・申込システム(NDL-OPAC)で検索できるようになっているが、かつては、その来歴や整理された年代(発行年ではない)の違いによって何種類ものカード目録や冊子目録があり、それらを別々に探さなければならなかった。これらの目録・蔵書のかたまりは「シマ」(島)と呼ばれ、資料を効率よく、もれなく探すにはシマの構成を知っている必要があった<sup>2</sup>。

国立国会図書館にもっとも所蔵が期待されるのは、明治以降に



東京本館 和図書の書庫（平成16年当時） この多くはデジタル化の後、関西館に移送されている

日本で出版された文献である。これらは未来の世代も利用できるよう書庫で未長く保存されている。近年は、原本の保存と利用の両立を目的として明治期以降に刊行された和図書のデジタル化が進められており、インターネットを通じて広く全世界からアクセスできるようになりつつある。これら和図書の来歴は、例えば「白井文庫」（本草学関係）などの特殊コレクションほどには解説されてこなかった。ここでは、明治期以降に刊行された一般的な和図書の収集と構成について簡単に紹介したい<sup>3</sup>。

## 1 国立国会図書館の和図書の成り立ち

国立国会図書館の蔵書は、主に昭和23（1948）年の国立国会図書館成立以降に納本制度により納入された刊行物のほか、帝国議会（貴族院・衆議院）、旧上野図書館<sup>4</sup>の旧蔵書からなる。

や古いものであるが、陶山国見「蔵書構成の実態調査及びその評価計画について」『図書館研究シリーズ』（16）1974.12 148 p.<請求記号 Z21-127>が参考になる。

4 上野図書館とは次の図書館の流れを総称している。明治5（1872）年に文部省博物館の管轄で書籍館として設置、翌年、太政官正院博覧会事務局に合併、明治8（1875）年に文部省の所管にもどり、東京書籍館と改称（書籍は太政官に残り、その多くは内閣文庫を経て、国立公文書館に引き継がれている）、明治10（1877）年に廃止されるが、同年文部省から東京府が引き継ぎ、東京府書籍館として開館、明治13（1880）年に文部省の所管にもどり、東京図書館となるも、明治18（1885）年に東京教育博物館と合併され、上野公園内に移転し、明治22（1889）年同博物館と分離、明治30（1897）年、帝国図書館となり、昭和22（1947）年に国立図書館に改称、昭和24（1949）年3月31日に閉庁し、前年に成立していた国立国会図書館に蔵書等が合併された。以上、国立国会図書館五十年史編集委員会編『国立国会図書館五十年史 資料編』（CD-ROM）国立国会図書館 2001 <請求記号 YH231-679>の「年表」、『上野図書館八十年略史』国立国会図書館支部上野図書館 1953 <請求記号 016.11-Ko5488u>を参照。

5 昭和23(1948)年9月から翌年7月1日まで、新聞出版用紙割当事務庁(昭和24年6月以降、総理府新聞出版用紙割当局)に納められた図書が、同庁から国立国会図書館に一部移管されている(国立公文書館に「新聞出版用紙割当事務局文書・昭和23年度国会図書館移管図書領収書及明細書綴・管理課資料係 101」(本館-3B-016-00・開00077100)および「新聞出版用紙割当事務局文書・昭和24年度国会図書館移管図書領収書及明細書綴・管理課資料係 102」(本館-3B-016-00・開00078100)が残されている)。その後、昭和26(1951)年、用紙の統制解除の際にも寄贈を受けている。『新聞出版用紙割当制度の概要とその業務実績』第1巻(復刻) 金沢文圃閣 2004 <請求記号 UE17-H18> p.27(原本は1951年総理府新聞出版用紙割当局刊)。

6 一般民間出版物の納本制度の導入期の状況については、山下信庸「国立国会図書館納本制度の原点」日本出版学会「布川角左衛門事典」編集委員会編『布川角左衛門事典』「布川角左衛門事典」刊行会 1998 pp.103-112 <請求記号 UE11-G14>参照。

7 木川田朱美、辻慶太「国立国会図書館におけるポルノグラフィの納本状況」『図書館界』61(4)(通号349)2009.11 <請求記号 Z21-131> p.242

8 国立国会図書館編・刊『国立国会図書館三十年史』1979 <請求記号 UL214-7> pp.2-14

9 岡田温「旧上野図書館の収書方針とその蔵書」『図書館研究シリーズ』(5) 1961.12 pp.202-203 <請求記号 Z21-127>。また、雑誌がメインであるが、戦前の納本の状況を知る上で、田中久徳「旧帝国図書館の和雑誌収集をめぐって—「雑誌」メディアと納本制度—」『参考書誌研究』(36) 1989 pp.1-21が参考になる(<http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/36-03.pdf>)。



旧上野図書館の書庫(明治39(1906)年頃)

## (1) 納本制度による収集

国立国会図書館の誕生とともに、国立国会図書館法に基づく新しい納本制度が始まり、同法によって国内で刊行される出版物が納入されることになった。しかし、当時はGHQ/SCAPのCIE(民間情報教育局)や新聞出版用紙割当事務庁<sup>5</sup>などへも出版物の納入が義務づけられていたことや納入事務の煩雑さから、出版物がなかなかうまく集まらなかった。このような状況を打開するために納本代償金制度や一括納入の仕組みが導入されたが<sup>6</sup>、昭和20年代前半の出版物については、国立国会図書館の所蔵率が低いのではないかと推測される。現在は納本制度が定着しているが、少数ながら今もなお納本に検閲のイメージをもつ出版社が存在するようである<sup>7</sup>。

## (2) 帝国議会(貴族院・衆議院)の蔵書

帝国議会では、明治23(1890)年から貴族院、衆議院両院それぞれの事務局図書に関する事務を行っており、元老院から図書の移管を受けていた<sup>8</sup>。その後、帝国議会の旧蔵書は国立国会図書館で受け入れられ、新たな請求記号が付与された。そのため、帝国議会の所蔵していた図書は一般の図書に混在しており、来歴を知るには実物の蔵書印を確認することなどが必要となる。

## (3) 旧上野図書館の蔵書

旧上野図書館の和図書の多くは、内務省から交付された図書(通称「内交本」)である<sup>9</sup>。明治以降の出版物は、図書については出版条例(明治2(1869)年)、出版法(明治26(1893)年)によって監督官庁に納本することが定められていた。明治8(1875)年3月、当時納本を担当していた文部省准刻課から上野図書館に検閲後の新刊図書が交付されるようになり、この事務が同年6月に

内務省に引き継がれた後には同省から交付された<sup>10</sup>。出版法は昭和20（1945）年9月に効力が停止され、内務省からの交付は、翌昭和21（1946）年9月20日に同省警保局が新聞用紙法・出版法に基づく届出・納本の廃止を通牒したことにより終焉を迎えた。この廃止に伴い、上野図書館は購入予算38万円を追加予算に計上したという<sup>11</sup>。

検閲を行っていた内務省から出版物を交付されていたため、上野図書館には戦前の出版物が網羅的に集まっていたイメージがある<sup>12</sup>。しかし、内務省の収集率がどの程度であったかについては、検討が必要であろう。昭和2（1927）年3月、第52回帝国議会衆議院の出版物法案委員会で、政府委員が事実上取り締まっていないものと答えている<sup>13</sup>ことから、内務省に届け出のなかった出版物もあることが推測される。さらに、内務省の権限は内地のみで、朝鮮半島、台湾、関東州といった外地には及ばない。そのため、現存する旧上野図書館の蔵書でも、外地の資料は関連機関からの寄贈が多い<sup>14</sup>。

さらに、上野図書館は内務省からすべての図書を受け取っていたわけではない。同図書館は書庫の狭あいのため、内務省から交付された図書のうち不要とみなしたものを廃棄していた。しかし、廃棄された図書のなかに、内務省がさかのぼって発行禁止にして上野図書館に返戻を求めた出版物が含まれることもあったため、明治31（1898）年には内務省から一部の図書の交付を打ち切ると通知されている<sup>15</sup>。

上野図書館は、図書を次のように大きく甲、乙、丙の3部に分けて整理していた<sup>16</sup>。

甲部：利用・保存の価値ありとするもので、蔵書の主要部分である。収集されると整理されて利用者の閲覧に提供されていた。

10 なお、内務省から交付された図書のうち奥付の発行日が訂正されているものがある。これは、内務省へ納本した日が出版法の規定（出版法第三条、発行の日より到達すべき日数を除き3日前に製本2部を添えて内務省に届ける）に合うように、訂正が行われていたものであるという（太田真舟「戦前の納本・検閲」『日本古書通信』40（10）1975.10 pp.4-7 <請求記号 Z21-160>）。

11 「納本制度廃止をめぐって 文化財の保存へ 新たな措置を要望」『日本読書新聞』1946.10.23（前掲、注4『国立国会図書館五十年史 資料編』の「年表」1946年9月20日に掲載）

12 例えば、「昭和二十年まで新聞雑誌と書籍は、たとえ謄写版で印刷したものでも、納本する義務があった。〔中略〕それを役人が検閲して、〔中略〕戦後その検閲はなくなった。したがって、納本の義務もなくなった。以前、納本された本は一部は自動的に上野の図書館に回されたから、日本中の本は遺漏なくここに集まった。あれはまず完全な図書館だった。」（山本夏彦『編集兼発行人』中央公論新社 2003 <請求記号 US41-H977> pp.14-16 同書の元版は1976年 ダイアモンド社刊）。

13 第52回帝国議会衆議院の出版物法案委員会で、従来「印刷ヲ以テ謄写ニ代フ」と書いて届けず出版法を逃れていたものについて政府委員は、本来取締まるべきだが、「害ガ無イモノ」であまり事実上取り締まっていないと政府委員が答えている（『出版物法案委員会議録』（第52回帝国議会・衆議院）『現代史資料 40 マス・メディア統制 1』みすず書房 1973 <請求記号 210.7-G29> p.47）。

14 岡田温先生喜寿記念会編・刊『岡田先生を囲んで 岡田温先生喜寿記念』1979 <請求記号 UL2148> p.15

15 大滝則忠、土屋恵司「帝国図書館文書にみる戦前期出版警察法制の一側面」『参考書誌研究』（12）1976.3（<http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/12-09.pdf>） pp.22-26

16 甲乙丙については、加藤宗厚「国立図書館の現状」加藤宗厚『図書館関係論文集』加藤宗厚先生喜寿記念会 1971 <請求記号 UL21-12> pp.508-509、前掲、注9岡田を参照。

17 東京図書館内規（明治14年7月1日施行）に「凡ソ、図書ハ之ヲ二種ニ大別シ、其閲覧ニ供スヘキ者ヲ甲種トナシ、唯ニ保存スルノモノヲ乙種トナス」とある（前掲、注4『上野図書館八十年略史』 p.64）。閲覧に提供されてはなかったが、明治年間に大日本教育会書籍館に貸し出したり（『東京図書館一覽』東京図書館 1890 p.53 「近代デジタルライブラリー」で閲覧可能）、「明治と民衆の文化」展（昭和31年）で展示されたことはあった（『明治の民衆と文化 資料展示会 目録と解説』 国立国会図書館 1956 <請求記号 210.6-Ko548m2>）。

18 未整理状態の大正期と昭和前期の乙部図書を見た記録に、山下武「国立国会図書館「乙部図書」は出版文化の貴重な宝庫である」がある（『出版ニュース』1989年7月中旬号 pp.57-68 山下武『古書の誘惑』青弓社 1991 <請求記号 UM51-E8>に収録）。

19 『国立国会図書館所蔵明治期刊図書目録』（国立国会図書館整理部編 全6冊 国立国会図書館 1971-1976）の刊行による。森清「国立国会図書館所蔵明治期刊図書目録について」『国立国会図書館月報』（102）1969.9 pp.2-7 <請求記号 Z21-146>が参考になる。

20 『国立国会図書館蔵書目録大正期』（国立国会図書館図書部編 全5冊 国立国会図書館 1998-1999）の刊行による。編纂の経緯等については、国立国会図書館図書部誌課「和図書週及入力計画最終段階へ 大正期分の入力作業に着手」『国立国会図書館月報』（414）1995.9 pp.2-9、国立国会図書館図書部誌課「和図書週及入力作業の終了について」『国立国会図書館月報』（456）1999.3 pp.2-9 <請求記号 Z21-146>も参考になる。

21 『国立国会図書館蔵書目録 昭和元年-24年3月』（国立国会図書館図書部編 国立国会図書館 1998）の刊行による。編纂の経緯等については、瀬川弘悦、菅原菫子「昭和前期和図書の週及入力開始にあたって」『国立国会図書館月報』（391）1993.10 pp.2-9、国立国会図書館図書部誌課「昭和前期和図書週及入力終了と『国立国会図書館蔵書目録昭和元年-24年3月』の刊行について」『国立国会図書館月報』（445）1998.4 pp.9-16 <請求記号 Z21-146>も参考になる。

乙部：目下の利用価値には乏しいが一応保存し、後日の判断に待つとしたもので、収集した当時は閲覧に提供されていなかった<sup>17</sup>。そのため、改装されずに元々の装丁が残されていることが多い。主に通俗書やパンフレット類が含まれるが、時期によって傾向に多少の違いがある。当時はほとんど日の目を見ず、戦後、国立国会図書館に引き継がれてから利用が可能になった<sup>18</sup>。明治期のものは1971年から1976年<sup>19</sup>、大正期のものは1998年から1999年<sup>20</sup>、昭和期のものは1987年から1998年<sup>21</sup>に冊子の目録が刊行され、初めて検索が可能となった。

丙部：利用・保存の価値なしとするもの。1年間の保存後廃棄。

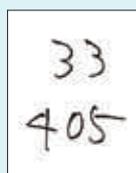
## 2 請求記号に見る和図書の来歴

国立国会図書館が所蔵する和図書の多くは書庫に収められ、「請求記号」の順番に書棚に並んでいる。請求記号は分類記号と図書記号（受入順を示す数字や特定の著者を示す記号）などから構成されており、それぞれの図書には、請求記号を示すラベルが背と表紙に貼られている<sup>22</sup>。この請求記号から図書の「シマ」を知ることができる。

なお、図書がマイクロフィッシュやデジタル画像に媒体を変換されている場合には、原則として原本は閲覧に供していない。新たな媒体には、原本とは別の請求記号が付与されていることもある。元の請求記号を知るには、「YD5-H-」で始まる場合はその部分を省略する。また、「YDM…」で始まる場合には、「近代デジタルライブラリー」で原本のラベルや図書に書きこまれた情報を見るか、『国立国会図書館蔵書目録 明治期』<sup>23</sup>を検索する必要がある。

(1) 旧上野図書館の蔵書

西村竹間編『図書館管理法』 金港堂 明治25年  
<請求記号 YDM101515>  
→近代デジタルライブラリーでラベルを見る  
33函  
405号 この函で405番目に受け入れたことを示す



平塚篤校訂『伊藤博文公修正憲法稿本』 秘書類纂  
刊行会 昭和12年  
<請求記号 YD5-H-305-51>  
→原本の請求記号は305-51  
305函  
51号 この函で51番目に受け入れたことを示す



松崎天民『犯罪哀話』 佐藤出版部 大正5年  
近代デジタルライブラリーの「書誌情報」画面で、  
<請求記号 YD5-H-特106-83> → 原本の請求記号は特106-83  
特106函 乙部図書を示す  
83号 この函で83番目に受け入れたことを示す

\*これら3点は「近代デジタルライブラリー」で閲覧可能。  
ただし、請求記号からは検索できない。



「近代デジタルライブラリー」  
本文および書誌情報画面

① 明治初期から昭和16（1941）年頃に受け入れた図書

「<sup>かんか</sup>函架」とは書架（書棚・本棚）を指し、図書館界で明治期から使われた言葉である<sup>24</sup>。上野図書館は、固定式排架（図書を大きさ別に分けて受入順に排架して書架上の位置を決める）によって請求記号を付与していた。これは、大規模な閉架式図書館では一般的な方法であった。上野図書館では昭和23（1948）年頃まで用いられていたが、後述のように昭和16（1941）年頃までさかのぼって日本十進分類法（NDC）によって再整理されている<sup>25</sup>。

この時期の図書のラベルを見ると、請求記号の多くは2種類の数字で構成されている。上部の数字は「<sup>かん</sup>函」（主に数字）、下部の数字は「号」（受入順の数字）を示す。函の記号は一部の例外を除き、本の内容・テーマを示すものではない<sup>26</sup>。パンフレット類では、数字だけではなく、その分野の頭文字を使用しているもの

22 「ラベルと請求記号」『国立国会図書館月報』(118)～(165)、1971.1～1974.12 <請求記号 Z21-146>、「NDL請求記号一覧」国立国会図書館百科編集委員会編『国立国会図書館百科』出版ニュース社 1988 <請求記号 UL214-E4> pp.79-100にも請求記号の構成について解説がある。なお、国立国会図書館50年史編集委員会編『国立国会図書館50年のあゆみ 国立国会図書館開館50周年記念』国立国会図書館 1996 <請求記号 UL214-G7> pp.42-43に様々な資料のラベルが掲載されている。

23 国立国会図書館図書部編 国立国会図書館刊 全8冊 1994-1995 <請求記号 UP111-E123>

24 「函架簿」「函架目録」（図書館問題研究会編『図書館用語辞典』角川書店 1982 <請求記号 UL2-22> p.75）を参照。

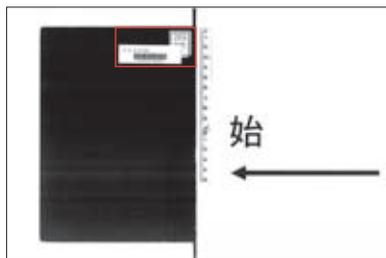
25 ただし、旧上野図書館の蔵書の書誌データには、主題を表す「件名」が付与されていない（明治期に刊行された図書には人名件名が付与されている）。

26 例外として、あるテーマで集められている函、たとえば教育関係の函などがある（前掲、注3陶山 資料 pp.61-63）。

もある。カタカナ1文字で表される函は、明治時代の大学・専門学校  
の通信講義録を示す。

なお、「特」で始まる函（特8～特72、特100番台、特200番台）  
は、当時は乙部に区分され、閲覧に提供されず、戦後に国立国会  
図書館が整理して閲覧を開始した際に付与した請求記号である。

② 昭和16（1941）年頃から昭和24（1949）年3月までに  
受け入れた図書



「近代デジタルライブラリー」本文画面

27 NDC第6版は昭和25（1950）年刊行。請求記号の構成については、前掲、注2福田 pp.94-95で触れている。

28 前掲、注8『国立国会図書館三十年史』 pp.244-246 なお、この状況は昭和31（1956）年5月、本館との整理方式の一元化が決定されるまで続いた。上野図書館の蔵書は昭和36（1961）年に本館へ移送された。

29 これら以外に年鑑類ではAで始まるものもあったという（『上野図書館の経験を語る』国立国会図書館業務こんだん会 1967 <請求記号 016.11-ko5483u> p.7）。Aは“annual”の省略と考えられる。

30 当時米国イリノイ大学図書館長。昭和23年7月に来日し、同年9月11日「国立国会図書館における図書整理、文献参考サービスならびに全般的組織に関する報告」を民間情報教育局長に提出した。報告の和訳は『国立国会図書館三十年史 資料編』国立国会図書館 1980 <請求記号 UL214-7> pp.335-355に収録されている。

31 国立国会図書館における分類法については、前掲、注8『国立国会図書館三十年史』 pp.219-224。NDCの採用とその後の経緯については、宮坂逸郎「大調査図書館における書架分類の再検討 特に国立国会図書館の事例を中心とする」『図書館研究シリーズ』（7）1962.10 pp.93-163 <請求記号 Z21-127>が参考になる。



尾佐竹猛編『明治文化の新研究』 亜細亜書房 昭和19年  
<請求記号 YD5-H-210.6-074ウ>→原本の請求記号は210.6-074ウ  
210.6 「歴史-日本-近代」の主題を示すNDC第6版の分類記号  
074 尾佐竹猛の著者記号（国立国会図書館で定めたもの）  
ウ 上野図書館旧蔵を示す

\* 「近代デジタルライブラリー」で館内のみで閲覧可能  
（書誌情報は館外でも見ることができる）。

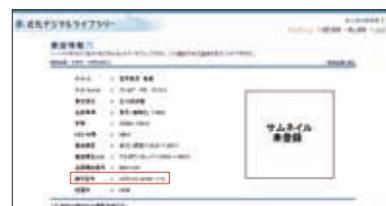
上野図書館では戦後、昭和23（1948）年の中頃から図書の分類  
にNDC第5版を使用していた。国立国会図書館への合併後、分  
類法について調整が図られ、昭和25（1950）年中頃からNDC第  
6版<sup>27</sup>を適用し、昭和16年頃受け入れた図書までさかのぼって再  
整理を行った<sup>28</sup>。このとき、昭和16年以前に受け入れていた参  
考図書類も選択的に再整理を行っている。

この時期の請求記号は数字とアルファベットで構成され、最後  
に上野図書館旧蔵を表す「ウ」がつく。なお、小説類、参考図  
書類、大型本の分類記号は、それぞれF（fiction）、R（reference  
book）、E（extra large size）のアルファベットから始まる<sup>29</sup>。

(2) 国立国会図書館成立以後に受け入れた図書

① 昭和23（1948）年から25（1950）年までに受け入れた図書

古川緑波『苦笑風呂』 雄鶏社 1948年  
<請求記号 YD5-H-a091-14 > → 原本の請求記号は a091-14  
a 赤坂本を示す  
091 「総記-随筆・雑書-日本語」の主題を示す  
NDC 第5版の分類記号  
14 この分類が示す主題において14番目に受け入れたことを示す  
\* 「近代デジタルライブラリー」で館内のみで閲覧可能  
(書誌情報は館外でも見ることができる)。



「近代デジタルライブラリー」  
書誌情報画面

32 NDC 第5版は昭和17（1942）年刊行。

国立国会図書館は、設立当初、三宅坂の庁舎と旧赤坂離宮（現赤坂迎賓館）を仮庁舎とし、上野図書館を支部としていた。昭和23年6月24日には図書館界の有識者を招き、図書を整理する際に使用すべき分類表について懇談会を行っている。その後、同年7月から和図書の目録作成が開始され、暫定的にNDCを用い始めた。国立国会図書館の業務に大きな影響を与えたGHQ/SCAP CIE特別顧問ロバート・B・ダウンズの報告書（いわゆる「ダウンズ報告」）<sup>30</sup>においてもNDCの使用を勧告している<sup>31</sup>。

この時期に受け入れた図書はその後「赤坂本」と呼ばれ、aで始まる請求記号をもつ。請求記号は、分類記号（NDC第5版<sup>32</sup>）と各分類における受入順を示す数字で構成される<sup>33</sup>。

33 学習参考書の請求記号には冒頭に「学」の文字がついている。学習参考書の書誌データは簡略なものである（「目録作業簡略整理要領」（昭和25年8月29日決定）『国立国会図書館法規要覧 昭和29年版』国立国会図書館管理部庶務課 1955 <請求記号 016.11-Ko548k2> pp.126-127を参照）。なお、国立国会図書館は、収集した図書の書誌データを作成する際に「整理区分」を定め、書誌データの詳細度などを決めている。整理区分は時期によって変化している。関連する規定として公表されたものに、「図書館資料の整理区分に関する件」（昭和39年3月13日）、「図書館資料の整理区分等に関する件」（昭和51年12月23日）、「図書館資料の整理区分及び整理要領」（平成9年12月1日）（それぞれ前掲、注4「年表」の各年月の項目にPDFファイルを収録）。岩猿敏生〔ほか〕共編『新・図書館学ハンドブック』雄山閣出版 1984 <請求記号 UL2-29> p.179にも当時の整理区分の規定が例示されている。



### 近代デジタルライブラリー

国立国会図書館の所蔵する、明治期から昭和前期（児童書は昭和30年頃まで）に刊行された図書のデジタル画像を閲覧するデータベース。著作権処理を行ったものはインターネットを通じて、それ以外のものは館内のみでご覧いただけます。

<http://kindai.ndl.go.jp/>

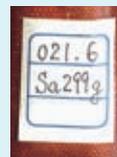
② 昭和25（1950）年から43（1968）年までに受け入れた図書



NDL-OPAC 書誌詳細表示画面

34 「国立国会図書館和漢書図書記号法」（昭和25年12月20日決定）『国立国会図書館例規集 昭和37年7月1日現在』国立国会図書館 [1962] <請求記号 328.016-Ko5482k> pp.315-322  
 学習参考書の請求記号には冒頭に「学」「学児」の文字がついている。学習参考書の書誌データは簡略なものである。「学習参考書（高校用）及び各種試験問題集の整理について」（昭和32年受第35号）（稲村徹元、佐久間信子「『小冊子』問題の20年」『図書館研究シリーズ』（12）1968.2 <請求記号 Z21-127> p.322-323に収録）。

齋藤昌三編『現代筆禍文献大年表』 粹古堂書店 1932年  
 請求記号 021.6-Sa299g  
 021.6 「図書・書誌学-著作-筆禍」の主題を示す  
 NDC第6版の分類記号  
 Sa299 齋藤昌三の著者記号  
 （国立国会図書館で定めたもの）  
 g タイトル『現代…』ローマ字表記の1文字目



昭和25年7月、NDC第6版が完成したのを機に、同年9月に適用することを決定した。請求記号は、分類記号（NDC第6版）や著者、書名、版次などを示す数字とアルファベットの組み合わせで構成される<sup>34</sup>。上述の上野図書館旧蔵本との違いはいくつかあるが、大きな違いは「ウ」の無いことである。

③ 昭和44（1969）年以降に受け入れた図書



NDL-OPAC 書誌詳細表示画面

35 NDLCでY31～Y251に分類されている学習参考書、電話帳、パンフレット、豆本などを指す。NDLCの最新版は、国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp/>）> 図書館員の方へ> 書誌データの作成および提供 > 分類・件名（[http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/ndl\\_ndlc.html](http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/ndl_ndlc.html)）を参照。

36 石山洋「逐次刊行物に扱う範囲の拡大について」『国立国会図書館月報』（299）1986.2 pp.2-10 <請求記号 Z21-146> 「新たに逐次刊行物扱いとする資料の判定基準および図書の整理区分の改正について」『印刷カード通信』（66）1986.9 pp.1-11 <請求記号 Z21-827>

吉田景保編著『日本郵趣文献目録』 双龍社 1979年  
 請求記号 D1-242

D1 「経済・産業-書誌」の主題を示すNDLCの分類記号  
 242 この分類で242番目に受け入れたことを示す



国立国会図書館は、成立以来、分類法としてNDCを用いていたが、その間、より利用しやすい新しい分類表の検討を行っていた。昭和37（1962）年に『国立国会図書館分類表 政治・法律・行政 予備版』を刊行し、館外に配布して意見を募った。これが国立国会図書館分類表（NDLC）の嚆矢となった。昭和38（1963）年から分類表が大きな主題ごとに順次制定、適用され、和図書全体には昭和44年（一部、簡略整理資料（Y分類）<sup>35</sup>は昭和39（1964）年から適用され、現在に至っている。なお年鑑類は、昭和61（1986）年1月以降に受け入れたものは逐次刊行物（雑誌）として、それ以前は図書として扱っている<sup>36</sup>。

請求記号は、分類記号（NDLC）と受入順を示す記号（数字またはアルファベットと数字の組み合わせ）で構成される。

### おわりに

以上、ごく簡略に国立国会図書館の和図書について触れた。現在のNDL-OPACでは、上述の受入時期などを意識することなく、まとめて検索することが可能となっている<sup>37</sup>。

本稿は大まかなものであるが、国立国会図書館の蔵書そのものについて、蔵書構成を利用した調査・研究の手がかりの一助となれば幸いである。

（すずき ひろむね 主題情報部政治史料課）

<sup>37</sup> ただし、適用する目録規則の変遷などのため、書誌データの内容が一律ではないことに注意が必要である。目録規則の変遷については、国立国会図書館ホームページ＞図書館員の方へ＞書誌データの作成および提供＞書誌データ作成ツール＞適用規則の変遷（<http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/hensen.html>）を参照。

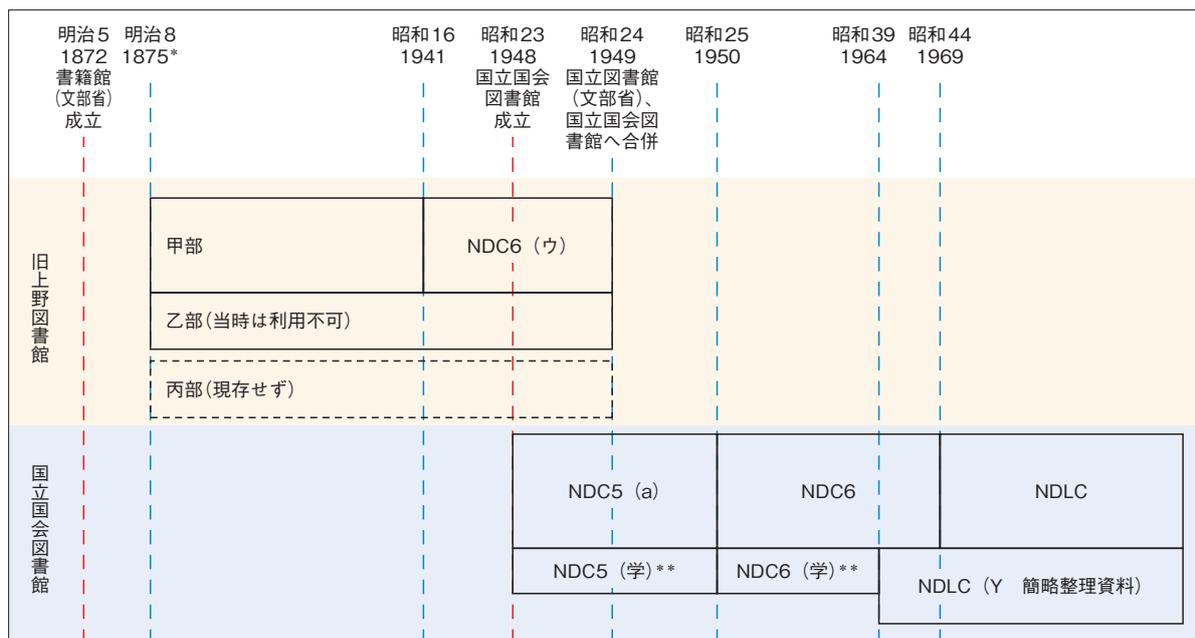
また、同じ図書でも、異なる来歴をもつ場合は別々に整理され、複数の請求記号をもっている。例えば大久保利謙著『日本の大学』（創元社 1943）には、次の2種類の書誌データが存在する。

①377-0581n

国立国会図書館で受け入れたもの。NDC第6版と著者記号、タイトルをローマ字表記した1文字目のアルファベットからなる請求記号。

②YD5-H-259-859（原本の請求記号は259-859）

旧上野図書館で受け入れたもの。「函」を示す数字と受入順の数字からなる。



和図書の概略

\* 明治8（1875）年までの蔵書は、官制上の経緯により内閣文庫（現・国立公文書館）へ移管されている。詳細については注4参照。

\*\* (学) は、学習参考書（簡略に整理された資料）を示す。

## レファレンス協同データベースをご存じですか？

○アリの巣は雨の日になるのか？

水が入ってくるのか？

○男性の髪形で「8：2分け」は、顔の

どの部分を基準にして分けるのか？

○4歳の子どもの神さまって何？と質問

されました。わかりやすく説明できる

絵本や子ども向けの本はありますか？

これらはいずれも、図書館で実際に

図書館員が利用者から受けた質問です。

図書館員はこういった質問に対して、図

書館にある本などを案内したり、各種資料を調

査して回答します。このやりとりはレファレン

ス・サービスと呼ばれています。

レファレンス協同データベース(通称「レファ協」)は、全国各地の図書館で行われたレファレンス・サービスの記録を中心に、レファレンスに役立つ情報を集めたデータベースです。よく間違われるのですが、「共同」ではなく「協同」です。レファレンス・サービスの向上を目指し、同じような質問を受けたときの参考情報とするために、いろいろな図書館が力を合わせて作りあげているデータベースなのです。ここ、試験に出ます(本当に大学の司書課程で試験に出たことがあるそうですよ)。

私の仕事はレファレンス・協同データベースのシステムの保守、参加館との連絡・調整な



シンボルキャラクター「れはっち」(職員の手作りです)

どです。さらに、この便利さを広くお知らせし、より多くの図書館からデータが登録されるよう、広報・勧誘にも力を入れています。最近では、twitterによる情報発信も行っています([http://twitter.com/crd\\_tweet](http://twitter.com/crd_tweet))。もっとたくさんの人に利用してほしい!もっとたくさんの図書館にデータを登録してほしい!と、友人と話しているときにまで、つつい宣伝をしてしまうことも。

レファレンス・協同データベースは、インターネット上でどなたでも利用できます(<http://crd.ndl.go.jp/>)。個人の調べ物にも活用できますし、読み物として楽しめるものもたくさんあります。冒頭の質問に図書館員がどんなふうに応えたか、ぜひ見てみてくださいね。

(図書館協力課協力ネットワーク係 れはっち)

# 本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

## 読売巨人軍75年史

読売巨人軍75年史編纂委員会編、読売巨人軍刊  
〒100-8151 東京都千代田区大手町2-1-1 大手町野村ビル7F  
2010.3 2冊（本編704頁、資料編687頁） 27cm  
<請求記号 KD962-J245 / J246>

野球ファンにとって野球を最も面白く感じるのは何歳くらいのときだろうか。

1934年から2009年まで各年10ページ前後でジャイアンツの成績や球界の動向を概説している本編を読みつつそういう思いが湧いた。

小学生から30代くらいまでの現役世代ならこんなことは考えないだろう。でも、全力疾走する機会も少なくなる世代には、ずっと野球が好きだったとしても、あの頃が一番面白かったなという時代があるのではないだろうか。

それは、ひいきのチームが強かった時代や好きな選手が活躍した時代かもしれない。しかし、成績はBクラスに終わったが若い選手が伸びた時代とか、自分の人生上の苦境とある選手のけがからの復帰とが重なっていた時代、なんて場合も多いのではないだろうか。野球は、単にチームの成績だけでなく、ファン一人ひとりの状況と交錯してその人だけの思い出を形成しているような気がする。

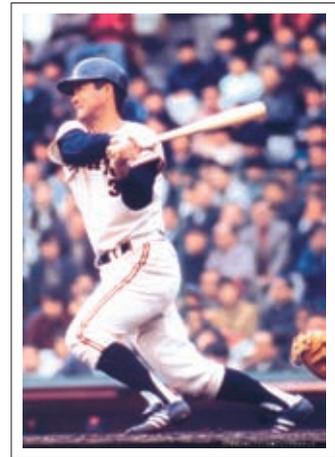
本書は、まずこんなふう読み物として読める。残念ながらというか当然ながらジャイアンツ中心の記述ではあるが、昭和43（1968）年の江夏投手（阪神タイガース）の三振奪取記録達成なども実に生き生きと書かれている。

2分冊目の資料編は、チームと選手の膨大な記録がきれいに整理されている。野球選手というのはまことに過酷なものだ。数字なんて結果の一部にすぎな

いのに、終わってみれば数字だけが残る。

しかし、見方によってはその数字も生身の選手の姿をよみがえらせてくれる。

例えば昭和49年。ジャイアンツのV9が途絶え、長嶋選手が引退した年だ。



口絵4枚目から 長嶋茂雄選手

この年の9月から10月半ばまでの堀内投手はほぼ中3日で12回先発（うち6回完投）、4回リリーフで登板し7勝1敗であった。特に9月28日と29日、中日との天王山では2日連続で先発している。私は29日の試合前の「ホリ頼む」「はい」という監督との会話を新聞で読んだのを覚えている。この年は結局中日がペナントレースを制し、金田ロッセがさらにその上を行った。

野球に関心のない方から見ると「何熱くなってるの」という世界だが、本書はこういう読み方もできる。

昭和60年には50年史が出版されている。75年史は写真や内容に根本的な変更はないが、記述は年ごとにまとめられてわかりやすくなり、データも豊富になった。装丁も踏襲されていて、継続性を重んじながらよりよいものにしようという方針を感じる。

もっとも、50年史にあった索引が75年史にないことは少し残念だ。索引があれば、野球史の参考文献として使いやすいだけでなく、個々の出来事と交錯した読者の思い出を次々に呼び覚ましてくれることだろう。

（主題情報部長 <sup>よしもと</sup> 吉本 <sup>おさむ</sup> 紀）

## 実録！“漫画少年”誌

昭和の名編集者・加藤謙一伝 平成21年度特別展

文京ふるさと歴史館刊

〒113-0033 文京区本郷4-9-29

2009.10 47頁 30cm

<請求記号 KC486-J135>

手塚治虫、トキワ荘の漫画家たち、『漫画少年』、『少年倶楽部』、『講談社の絵本』、『のらくろ』、田河水泡、吉川英治、大佛次郎、佐藤紅緑。

華やかな名前の数々を耳にすることは多いだろう。しかし、これらの名が結びつく一人の人物を知る人はさほど多くない。戦前・戦後を通し子どもの雑誌を作り続けた編集者、加藤謙一がその名である。

戦前期には、『少年倶楽部』を最盛期75万部を誇る雑誌へと押し上げ、幼児向け絵本に対する一般認識を覆す『講談社の絵本』シリーズを手がけた。当時は格下とみなされていた少年誌への大人向け一流作家の起用、画期的な組立式紙模型の付録、無名だった田河水泡の「のらくろ」連載開始、オールカラー・一流画家の挿絵を使った子ども向け絵本など、斬新な企画を次々と打ち出した。

だが特筆すべきは、本書タイトルにある『漫画少年』（学童社 1948～1955年）だろう。無名だった手塚治虫の「ジャングル大帝」を一読した加藤は、未完成にもかかわらず『漫画少年』への連載を決める。「ジャングル大帝」は爆発的な人気を得て、刺激を得た読者たちがペンをとり、『漫画少年』の投稿欄を賑わせる。投稿者から本格的に漫画家を目指す人々も現れる。彼らが集うようになるのが、トキワ荘だ。

『漫画少年』自体は時流に抗えず、わずか8年の短命に終わる。しかし、投稿者の中から漫画にとどまらない様々な分野の担い手を輩出したことで、その

誌名は人々の記憶に残るものとなった。

『漫画少年』創刊の辞はこう始まっている。

漫画は子供の心を明るくする

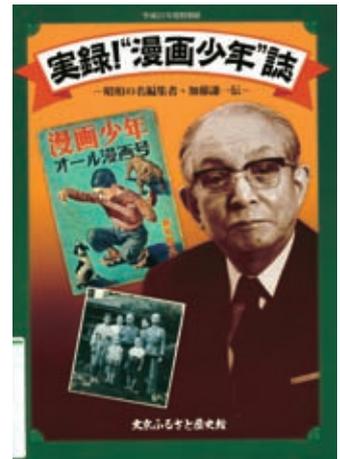
漫画は子供の心を楽しくする

だから子供は何より漫画が好きだ

漫画少年は、子供の心を明るく楽しくする本である。編集者となる以前教師だった加藤の編集方針は、戦前・戦後を通して一貫していた。「子どもたちこそ最高の作品を与えるべきだ。」加藤は教師時代、学級新聞に目を輝かせる子どもたちから、活字文化が感受性に及ぼす力を確信したという。その経験から編集者を目指し、雑誌を通して全国の子どもに有形無形の大きな影響を与えた。

本書は、加藤が上京以来延べ54年間を過ごした文京区で開催された、彼の軌跡を絵画・漫画史と絡めながら紹介する企画展の図録である。編集者は表に出ないもの、という信念を持っていた名黒子役に改めて光を当て、当時の雑誌や原稿、手紙の写真を交えて彼の業績を追っている。ここに挙げた以外にも、周囲の作家や漫画に関する考察が端的に紹介されており、加藤の活躍した時代背景を知る上で興味深い。さらに深く知りたい方には巻末の参考文献も役立つだろう。なお、平成22年9月には弘前大学附属図書館に、加藤がかかわった作品等からなる「加藤謙一文庫」が設置されている。

(資料提供部雑誌課 にしたに 西谷 ともこ 朋子)



### 天皇皇后両陛下の 行幸啓

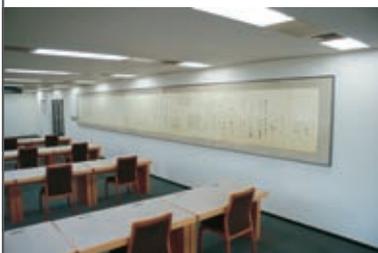


2月14日、東京本館に天皇皇后両陛下の行幸啓を賜った。

午前11時30分、両陛下は南口正面玄関で長尾真館長および吉永元信副館長の出迎えを受けられた。最初に長尾館長から東京本館、関西館および国際子ども図書館の模型をお見せしながら国立国会図書館の施設についてご説明した。続いて長尾館長の先導で新館目録ホール、新館地下8階の書庫で光庭および海外邦字紙、別室で『梅園魚品図正』『伊藤博文書簡 井上毅宛（明治15（1882）年7月1日）』をはじめとする貴重書および憲政資料とその一部のデジタル画像をご覧になり、午後1時28分にお帰りになった。途中、資料のデジタル化とその利用について長尾館長にご質問があった。

なお、両陛下は皇太子同妃両殿下時代の昭和37（1962）年10月3日に、その前年竣工した本館庁舎をご覧になり、また昭和54（1979）年11月1日には、当時開催していた「ふるさと展」に加え、視覚障害者に対する図書館サービスについてご視察されている。天皇皇后両陛下によるご視察は、永田町の庁舎が竣工した際の昭和36年11月6日以来、約50年ぶりである。

### 東京本館に書を展示



土岐妍子氏の書「春風馬堤曲」の寄贈を受け、東京本館 本館3階第二閲覧室に展示した。

土岐氏は、日比野光鳳氏に師事し、水穂会所属。日展会友。「春風馬堤曲」は俳句、漢詩、散文からなる与謝蕪村の作品で、大坂に奉公している少女が藪入りで帰郷する様子を描いたものである。

## お知らせ

### ■ 平成23年度 国立国会図書館 職員採用試験

平成23年度の職員採用試験を次のとおり実施します。

- 職務内容 I・II種：調査業務・司書業務・一般事務等の館務  
III種：司書業務・一般事務等の館務
- 勤務地 東京都（東京本館・国際子ども図書館）・京都府（関西館）  
（転勤があります）
- 試験の概要（詳細は試験案内またはホームページで必ずご確認ください）

種類	大学卒業程度		高校卒業程度
	I種	II種	III種
受験資格の概要※	昭和57年4月2日～平成2年4月1日生まれ（平成2年4月2日以降生まれでも、大学卒業または卒業見込みであれば可）	昭和57年4月2日～平成2年4月1日生まれ（平成2年4月2日以降生まれでも、大学・短大・高専卒業または卒業見込みであれば可）	昭和63年4月2日～平成6年4月1日生まれ（高校卒業・卒業見込み以上、ただし大学卒業・卒業見込みは不可）
受付期間	平成23年4月4日（月）～4月21日（木）（消印有効）		平成23年8月22日（月）～9月2日（金）（消印有効）
1次試験	平成23年5月21日（土）		平成23年9月24日（土）
会場	1次試験は東京および京都で行います。 2次試験以降は東京のみです。		東京のみで行います。

※日本の国籍をお持ちでない方、国会職員法第2条の規定により国会職員となることができない方は受験できません。

- 受験申込書および試験案内の入手方法  
東京本館および関西館で配布します。  
郵送で請求される際は、封筒の表に受験する試験の種類を朱書き（例：「I種・II種請求」）、返信用封筒（角型2号）を同封してください。返信用封筒にはあて先を明記し、切手（140円）を貼ってください（I種とII種は共通の書式です）。
- お問い合わせ・資料請求先  
国立国会図書館 総務部人事課任用係  
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1 電話 03(3506)3315(直通)  
国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp/>）>採用情報  
URL <http://www.ndl.go.jp/jp/employ/>



## お知らせ

### ■ シリーズ・いま、世界の 子どもの本は？（第4回） 「いま、ドイツの子どもの本は？」

国際子ども図書館は、社団法人日本ペンクラブとの共催で、「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」と題した世界各国の児童書に関するイベントを開催しています。

シリーズ第4回は、子ども読書の日である4月23日（土）に、「いま、ドイツの子どもの本は？」と題して、ドイツの子どもの本の現在と、その魅力をご紹介します講演会を開催します。入場は無料です。

○日 時 4月23日（土）14:00～16:30

○会 場 国際子ども図書館ホール（3階）

○対 象 中学生以上（定員約100名）

○プログラム

第1部「ドイツの子どもの本の戦後から最近まで」（仮題）

講師：酒寄進一氏（翻訳家・和光大学教授）

第2部「ドイツの子どもの本の現場から」（仮題）

講師：那須田淳氏（作家）

○お申込方法

次のいずれかの方法で、参加者1名につき1通に、氏名（ふりがな）、年齢、郵便番号、住所、電話番号をご記入の上、4月8日（金）までにお申し込みください（必着）。申込多数の場合は抽選となります。

[往復はがき] 〒110-0007 台東区上野公園12-49

国際子ども図書館「4月23日講演会」係

[電子メール] pen10423@kodomo.go.jp

（タイトル・件名欄に「4月23日講演会申込み」とお書きください）

○お問い合わせ先

国立国会図書館国際子ども図書館 企画協力課企画広報係

電話 03（3827）2053（代表）



## お知らせ

---

### ■ 平成23年度 図書館情報学実習生を 募集します

図書館情報学実習を履修する学生を対象に、実習生を募集します。

#### ○応募資格

- ・大学等（短大・大学院を含む）に在籍する学生のうち、司書資格取得にあたり図書館情報学実習を履修する方、または図書館情報学を専攻し図書館情報学実習を履修する方。
- ・大学等（短大・大学院を含む）の長から推薦を受けた方。
- ・実習日までに実習期間中に発生した事故等に関する保険に加入できる方。

#### ○応募方法

大学等の図書館情報学課程・司書課程等担当教員がとりまとめ、学校単位でお申し込みください。実習希望者本人からの申込みは受け付けておりません。

#### ○募集期間

3月1日（火）～4月21日（木）

#### ○実習期間

東京本館 8月18日（木）～8月31日（水）の土曜日、日曜日を除く10日間

関西館 9月8日（木）～9月15日（木）の土曜日、日曜日を除く6日間

国際子ども図書館 8月30日（火）～9月8日（木）の日曜日を除く9日間

#### ○お問い合わせ・お申し込み先

東京本館、関西館で行う実習

国立国会図書館関西館 図書館協力課研修交流係

〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3 電話 0774(98)1444(直通)

国際子ども図書館で行う実習

国立国会図書館国際子ども図書館 企画協力課協力係

〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49 電話 03(3827)2053(代表)

※詳細は、必ず国立国会図書館ホームページでご確認ください。

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)

>ニュース (2011年3月1日)

URL <http://www.ndl.go.jp/jp/news/index.html>

## お知らせ

### ■ 「本の万華鏡」第6回 「へのへのもじえ —文字で絵を描く—」



第3章から「人丸図」  
(山東京伝作 『奇妙図彙』)  
朝倉治彦監修『訓蒙図彙集成 第  
18巻』大空社 2000年 <請  
求記号 UR1-G54 > p. 262

落書きの定番「へのへのもへじ」を誰もが一度は書いたことがあるのではないのでしょうか。2月22日から提供を開始した「本の万華鏡」第6回では、「へのへのもへじ」に代表される「文字絵」を取り上げています。「文字絵」とは、文字を連ねて輪郭を表したり、絵の中に文字をあしらって表現する絵のことです。平安時代から現代まで連続と続く歴史があり、それぞれの時代で趣向を凝らした絵が描かれてきました。「へのへのもへじ」にも実は長い歴史があるのです。

第1章では平安時代の葦手絵を中心に文字絵の始まりを、第2章では神仏への信仰から生まれた文字絵を、第3章では江戸時代を中心に遊びの要素をもつ文字絵をご紹介します。文字を使って絵を描くことへの情熱を、また洒落や粋の心を感じていただければ幸いです。

○URL <http://navi.ndl.go.jp/kaleido/>

### ■ 新刊案内 国立国会図書館の 編集・刊行物



レファレンス 721号 A4 108頁 月刊 1,050円 発売 日本図書館協会  
〈小特集：諸外国の社会保障〉

- ・アメリカの高齢者医療制度の現状と課題
- ・ドイツの保育制度
- ・スウェーデンの子育て支援策
- ・在日米軍の夜間離着陸訓練（NLP）と基地移設問題

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03 (3523) 0812

# Commemorating the 600th issue

## 『国立国会図書館月報』 600号を迎えて

昭和36(1961)年、永田町庁舎(東京本館 本館)の開館とともに創刊した『国立国会図書館月報』は、本号で600号を迎えました。『月報』の50年にみる国立国会図書館の歩みをご紹介します。

### 1号(1961年4月)

鈴木正吾議員(衆議院議院運営委員会図書館運営小委員長)が「図書館とわたくし」というリレーエッセイの初回で、「利用のすすめ」と題して調査及び立法考査局のレファレンス・サービスに対する感想を寄せています(pp.6-9)。「納本制度」戦前戦後 問題と解説」では、国立国会図書館の納本制度を解説し、戦前に検閲を目的としていた制度からの変貌を紹介しています(pp.2-5)。



5(1961年8月)号「図書館はこうして運ばれた」(pp.17-20)から 離宮を出てゆくトレーラー  
仮庁舎であった赤坂離宮(現・赤坂迎賓館)から永田町庁舎への移転の様子。

### 100号(1969年7月)

連載「科学技術資料ノート」が始まっています(pp.26-27)。国立国会図書館は、日本における科学技術情報の基盤整備の一環として、内外の科学技術関係資料・情報の収集に努めており、『月報』でも折りに触れて関連記事を掲載しています。



また、昭和43(1968)年11月に本館が全面完成し、館内の施設を紹介する連載もありました。

104(1969年11月)号「施設の紹介」(p.1)から  
目録カードの引出しが並ぶ「目録室」(現・東京本館 本館目録ホール)

月報から  
生まれた本

『稀本あれこれ  
国立国会図書館の蔵書から』  
出版ニュース社 1994



28(1963年7月)号から564(2008年3月)号まで続いた連載「稀本あれこれ」の初回から第319回(1993年11月)を中心に、国立国会図書館の貴重な、あるいはユニークな蔵書を紹介するもの。現在は「今月の一冊」としてさらに幅広く蔵書を紹介している。

『国立国会図書館のしごと  
集める・のこす・創り出す』  
日外アソシエーツ 1997



## 200号 (1977年11月)

「日本MARCとMARCネット・ワーク」では、和  
図書の書誌データの機械処理試行を機に、書誌デー  
タの機械処理と標準化における課題について述べ  
ています(pp.4-15)。国立国会図書館は、昭和46(1971)  
年以来、国会会議録総索引、雑誌記事索引を機械  
編纂してきました。203 (1978年2月)号では「新  
納本週報の刊行について」として、国内の出版物  
の記録である現「日本全国書誌」週刊版の機械編  
纂が始まることを紹介しています (p.19)。



205 (1978年4月)号「本の装幀」展示会を観て」(pp.14-16)から  
昭和53年2月に行われ、人間国宝芹沢銈介氏の作品など約360  
点を展示した。入場者は9日間で5千人にのぼり、展示会目録  
<請求記号 UE71-7>も好評だった。

## 300号 (1986年3月)

「新館への動き 移転計画」では、東京本館 新  
館の開館(1986年9月)を控え、雑誌・新聞の移転、  
新しい閲覧室・資料室の案内と、移転に伴うサー  
ビスの一時休止について案内しています (p.17)。  
305 (1986年8月)号には、新館吹き抜けに展示  
しているタピストリー「天の岩戸」について、作  
者池田満寿夫氏が文章を寄せ、「私にとって最大  
であると同時に私自身の芸術の集大成である。」  
と書いています (pp.4-5)。



306 (1986年9月)号「新しい閲覧体制—新館をオープンして—」  
(pp.2-8)から  
新館開館とともに新設された古典籍資料室(旧・貴重書室)

296 (1985年11月)号から現在まで続  
く職員のコラム「館内スコープ」をもと  
に、国立国会図書館の業務を紹介するも  
の。田村俊作氏(現・慶應義塾大学文学  
部教授、三田メディアセンター所長)に  
よる解説が付される。

『人と蔵書と蔵書印  
国立国会図書館所蔵本から』  
雄松堂出版 2002



166 (1975年1月)号から477 (2000年  
12月)号まで連載した「国立国会図書館  
所蔵本 蔵書印」をまとめたもの。蔵書  
の元の所有者の蔵書印を解説とともに紹  
介している。電子展示会「蔵書印の世界」  
(<http://www.ndl.go.jp/zoshoin/>)で内容  
の一部を見ることができる。

## 400・401号 (1994年7/8月)

「国立国会図書館に期待すること」では、400号の刊行にあたり各界の方々の声を掲載しています(pp.30-37)。紀田順一郎氏の「資料の多様化についての積極的な対応を期待している」という言葉は、そのまま現在にもあてはまるのではないのでしょうか。

このころから、現在の電子図書館サービスにつながる業務機械化の話題が多く掲載されています。



398 (1994年5月)号「明治期刊行図書の遡及入力を終えて」(pp.2-8)から 入力用データ票の山  
カードや冊子形態だった書誌データの機械入力が進められた。

## 500号 (2002年11月)

「電子図書館サービスの新たな展開」では、2002年10月の関西館開館を機に拡充された電子図書館サービスについてその概要を紹介しています(pp.19-25)。同年5月には国際子ども図書館が開館しており、当時は毎号に「国際子ども図書館のページ」として施設等の紹介やイベントのお知らせが掲載されています。

(総務部総務課)



495(2002年6月)号「特集 国際子ども図書館全面開館」(口絵、pp.1-12)から  
テープカット



500号「特集 国立国会図書館関西館開館」(口絵、pp.1-17)から  
記念式典

### 月報の变身



1 (1961年4月)号



565 (2008年4月)号

創刊時はA5判・縦組み。表紙のデザインおよび題字は職員による。表紙の色は年によって変わり、274 (1984年1月)号から表紙に目次を掲載。553 (2007年4月)号でフルカラー化し、565 (2008年4月)号から現在のA4判・横組みとなる。

岡部史郎副館長(当時)の「創刊のことば」(1号 p.1)に示された「わが図書館の目的、方針および活動状況を、絶えず、正確にできるだけ広く報告する」という方針は、現在も変わらない。一般に流通していない本を紹介する「本屋にない本」は、創刊から現在まで続いている。

## CONTENTS

- 02 Book of the month - from NDL collections  
*Shimpan Heianjo annai no zu*  
Old Kyoto shown in maps of the Tokugawa era
- 04 Books tracing the history of books  
Heilbrun collection of old catalogues and bibliographies
- 13 Essay on languages (3) Grammatical person
- 14 Layers of memory and history    Review of the National Year of Reading
- 20 Japanese books in NDL
- 30 <Tidbits of information on NDL>  
Do you know the Collaborative Reference Database?
- 31 <Books not commercially available>  
○ *Yomiuri Kyojingu 75-nenshi*  
○ *Jitsuroku! "Manga Shonen" shi : Showa no meihenshusha Kato Kenichi den : Heisei 21-endo tokubetsuten*
- 33 <NDL News>  
○ Their Majesties the Emperor and Empress of Japan visit the NDL  
○ Calligraphic work on view in the Tokyo Main Library
- 34 <Announcements>  
○ Announcement of the employment examinations for FY2011  
○ Series: What's Happening with Children's Books in the World? (4) What's Happening with Children's Books in Germany?  
○ NDL accepts applications for internship on library and information science FY2011  
○ Kaleidoscope of Books (6) "Japanese pictorial calligraphy"  
○ Book notice - Publications from NDL
- 38 Commemorating the 600th issue of the *National Diet Library Monthly Bulletin*

## 国立国会図書館月報

平成23年3月号 (No.600)

平成23年3月20日発行 定価525円  
(本体500円)

発行所 国立国会図書館  
編集責任者 山田敏之  
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1  
電話 03(3581)2331(代表)  
FAX 03(3597)5617  
E-mail geppo@ndl.go.jp

発売 社団法人日本図書館協会  
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14  
電話 03(3523)0812(販売)  
FAX 03(3523)0842  
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜き取りして転載される場合には、事前に当館総務部総務課に連絡してください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 「刊行物」 > 「国立国会図書館月報」でご覧いただけます。



「名所江戸百景 隅田川水神の森真崎」  
歌川広重（1世）画 魚屋栄吉 安政3（1856）年  
1枚 34.0×22.4cm  
（『名所江戸百景』＜請求記号 寄別1-8-2-1＞所収）

## 国立国会図書館月報

平成23年3月20日発行（毎月1回20日発行）  
（3月号通巻600号）

発売：社団法人 日本図書館協会 定価 525 円（本体 500 円）